

愛媛大学教育学部

第123号

# 同窓会報



愛媛大学教育学部同窓会事務局

☎ 790-8577 松山市文京町3番  
愛媛大学教育学部総務係室内

☎ (089)927-9383(直通) FAX(089)927-8304

E-mail : dosokai@ed.ehime-u.ac.jp





ご挨拶



愛媛大学  
教育学部長  
佐野 栄

同窓会会員の皆様におかれましては、日頃から愛媛大学教育学部に多大なご支援を頂き、心より感謝申し上げます。さて、平成二十八年度、愛媛大学は新しい組織体制での再出発をいたしました。教育学部は「ゼロ免課程」を廃止して教員養成に特化することになりました。ですから、一学年、学校教育教員養成課程百四十名、特別支援教育教員養成課程二十名、計百六十名での再出発です。さらに、大学院教育学研究科には、新たに教育実践高度化専攻(教職大学院)が設置されました。教育学部、教育学研究科の改組の詳細な内容は、同窓会報第百二十一号の三浦前学部長のご挨拶の中に報告されていますのでここでは省略

させていただきます。

教育学部では、平成元年四月に発足した「ゼロ免課程」が約三十年の歴史に幕を下ろすことになりました。この間、情報社会課程として発足した「ゼロ免課程」は、平成八年に情報文化課程に改組され、さらに平成十一年には、情報文化課程、生活健康課程、芸術文化課程に改組、そして平成二十年に、総合人間形成課程とスポーツ健康科学課程に改組され、現在に至っている次第です。平成二十七年以前に入学した、現在在学中の学生の皆さんが全て卒業すれば「ゼロ免課程」は完全にその姿を消すこととなります。私が愛媛大学教育学部に赴任したのが平成元年十二月でしたので、何か感慨深いものがあります。私が教育学部に赴任して最初に担当した情報社会課程の情報科学コースの学生さんたちは、「ゼロ免課程」の一・二期生ということもあり、非常に印象に残っています。何が印象に残っているかというと、当時の学生は、総じて、活動的であったというところでしょうか。宿泊研修、懇親会、ソフトボール大会な

ど、「遊び」の企画に関しては努力をいとわない学生が揃っていました。当時私は赴任したての新米教員ということもあり、また、学生との年齢も近いこともあってか、よくこの類の「遊び」に誘われたものでした。そのせいもあってか、三十年近く経った今でも多くの卒業生の皆さんと連絡を取り合っている状態です。北は北海道から南は九州まで、全国各地で活躍しています。中には海外を飛び回っている強者もいます。また、愛媛大学の職員として大学の発展に貢献している卒業生もいます。一昨年の愛媛大学ホームカミングデイでは、情報科学コース開設当時の卒業生で久しぶりに同窓会を行ったのですが、全国各地・海外から二十名近くの卒業生が集まり、大変盛り上がりしました。近年の大学改革の荒波が押し寄せる中、全国の教員養成系大学・学部設置されている「ゼロ免課程」は原則廃止される方向で作業が進んでいます。そして全国的に教育学部は、教員養成に特化していくわけですが、同時に学部の規模は徐々に縮小される方向にあります。現在は、教員の大量退職の時期ですので、新規に採用される教員の数も多いのですが、この先十年も経つと、大量退職も終わり、さらに少子化の影響も受け、教員採用数は激減する見通しです。今後、教育学部の将来像を早急に描き、準備を進めていく必要があります。

一方、平成二十七年末に中央教育審議会は、これからの学校教育のあり方に関する答申を出しました。答申では、これからの学校運営について、「チーム学校」の概念を導入するよう求めています。すなわち、これからは、学校の運営を地域の人材をも活用して、地域と一体となって子どもたちを育てていこうというものです。スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなど、学校現場周辺を支える人材の育成も急務となってきました。これまで、教育学部が培ってきた「ゼロ免課程」に当該人材育成の鍵があったような気がするのですが、時すでに遅しといった状況です。同窓会の皆様、現在の教育学部を取り巻く状況は決して明るくはないえませんが、しかしながら、私は、教員の養成は、地域における子どもたち、すなわち、次世代の地域を担う人材育成の要であると信じています。教員養成は、愛媛大学がその機能強化を推進する戦略の一つに掲げている「地域の持続的発展を支える人材育成の推進」の中核を担う位置付けであるといっても過言ではありません。今後、地域の皆様との一層の連携体制を強め、確かな教育力を備え、地域と協力して子供たちを育てることのできる教員の養成に努めてまいります。同窓会の皆様には、今以上のご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

目次

表紙

「SUBUNE(碎)」……宮川淳一郎  
題字 元愛大教育学部教授 菊川 國夫

「ご挨拶」……佐野 栄 (1)

心 響……愛媛大学名誉教授 井門 義男 (2)

「北アイルランドで知った母の死」……愛媛大学名誉教授 井門 義男 (3)

「隔田学教授 今日日は」……理科教育研究室訪問 (5)

「大学生活最後のチャレンジ」……教科教育専攻二回生 富田 湧 (5)

「地域課題解決を目指す」……自転車旅行推進の現場から (7)

NPO法人シクロトリズムしまなみ 代表理事 山本 優子 (11)

「学部最近のニュース」……科学イノベーション挑戦講座受講生がジュニアサイエンスリサーチミーティングで最優秀賞を受賞しました (16)

「教育学部の学生がえひめ科学特別授業を実施しました」……松山市「ことばのちから事業」に賛同した教育学部音楽専攻生が「正岡子規のふるさとシンフォニー」を演奏 (16)

表紙作品 「SUBUNE(碎)」について…… (16)

職場便り…… (13)

「思い出の山越グラウンド」……内子町・天神小教諭 高田 明知 (13)

「教員採用試験と私」……西予市・城川小教諭 横田 省吾 (13)

「一期一会」……愛南町・柏小教諭 エルマン 祐子 (13)



北アイルランドで

知った母の死



愛媛大学名誉教授 井門 義男 (昭三三卒)

もう三十数年前のこととは言え、北アイルランドで初めて知った母の死。幾つの年になっても私の脳裏から去ることがない。当時文部科学省の長期在外研究員という恩恵に浴し、ロンドン大学にて十か月研修の機会を得た私は、日頃イギリスの方言にも興味を抱いていたせいもあるが、即、北アイルランドの最北端の地・ポートルッシュへ旅することにした。

当時は未だIRA(アイルランド共和国軍)の勢力が残存している、私の企画に対し多くの学友の反対があったものの、ただ一人某国立大学のK教授が快く賛同してくれたので、結局彼と私のみの方言収録の旅となった。

まずは、アイルランド海を飛行機で一飛び。夢にまで見たベルファーストに無事着陸。ベルファースト駅からは車中の人となり、最北端の町ポートルッシュへと向かう。車窓からの眺めは、緩やかな丘陵地帯に戯れる羊の群れ。出発してから程なくして、小学六年生一行がちょうど野外植物観察のため乗り込んできた。我々はノートを破り、鶴を折って一人一人に配ってやり(これはK教

授)、私は名前を漢字でサインし、小さいながらも国際親善に役買った次第。一行下車の際には引率教員から深々とホームで頭を下げてのお礼。

さて人口八千人に満たない港町ポートルッシュに着いたのは夕暮れ。さすが最果ての地とあって空はどんよりと陰鬱な空気を漂わせていた。宿泊はホテルというよりも殆どが一階もしくは二階造りで、白くペンキ塗りされたものが多く、一見英国本土のBB(朝食付き簡易宿)を回想させるものであった。ホテルにて一段落の後、いよいよ方言に接したいとばかりホテルを後に先ず港の裏町に足を運ぶ。ところが暫らくして先ほどの鉛色の雲が、常夏ハワイのリクイッド・サンシャインを想わせるスコールを運び込んできた

え、私は土地言葉の究明こそが方言研究の原点であり、その為にはその土地の土の匂い、風、水、そして土着の人々との直接の触れ合いこそが肝要であることを、身を以て体験したことである。机上の書物での研究では方言の表層構造を解したとしても、人の生き様を軸とした深層構造に触れることはできないものである。

さて、小雨の中をホテルに帰り、床に就く。物音一つしない不気味なほどに静かな夜であった。ただ耳に入るのは北海の岸辺をさまよふ海鳥の鳴き声のみ。

翌朝目覚めると、昨夜からの雨が嘘のようにおさまりはしたものの、やはり最北端とあって空一面が灰色の雲に覆われ静かな朝であった。ところが私がコートハンガーからジャケットを取ろうとした瞬間、ハンガーの首が折れた。更に屋外に出てみると黒い海鳥の群れがホテルの上を数回となく円を描いて飛んでいた。ああ、内地では何か不吉なことがあったに違いないと想い、一路ベルファーストに向かった。そして列車を降りるや否や、急いでベルファースト国際空港の電話ボックスから妻に電話し母の様子を伺うと、妻曰く、「あなたには申し訳ないのですが、母親は昨日埋葬しました。母親の最後のことは、義男が帰ってきたら、よく頑張ったと言っていました。この言葉を聞くや否や私は胃に穴が開いた様な一種の虚無感におそれ、電話ボックス内に崩れる。それを遠くで見ていたK教授は私を抱きかかえ、テレホンカードの追加をしてくれて助



いで、我々は近くのバブにてしばし雨宿り。そこで会ったのは、首まで赤く日焼けした漁民仲間の会話。言うまでもなく、我々にとつては方言収録に格好の場であるものの、互いに交わす怒涛のような音調、極端な母音の変種、身体の動き等からして我々の介入には程遠いものがあった。(方言に関する詳細は省略)。唯一の収穫とい

いよいよベルファースト国際空港出発となると、その直前に発見された、エンジンの不具合。そのせいで我々の乗る飛行機は、約二時間遅れとなった。それにしても離陸前に発見されたことは大きな救いであった。機上では涙の乾く間もなく、アイルランド海上空を泳ぐように南東に約一時間半飛びヒスロー空港に無事帰着。ロンドンでは、スーパームーンを想い出すような月が煌々と街路樹を照らしつけていた。宿舎に帰る途中K教授の提案で「嵯峨」という日本食堂に立ち寄り、お通夜の酒を酌み交わした。「悲しいときは身一つ」そんな心境にある私の気持を察しての氏の計らいだったのである。その夜はY.M.C.A.(ロンドンの国際寮)に帰り執床午前一時三十分。

床に一人横たわり詠める詩一首  
最果ての  
岸辺にさまよう母の霊  
わが涙岩に砕けん  
(一九八五年七月)

それから帰国後半年と経たぬうちに、認知症の父親は、母親の後を追うように帰らぬ人となった。イギリス各地で撮った数百枚もの貴重なカラー 슬라이ドを、一枚として父親にも鑑賞してもらえなかったことも悲しい。その気持は今も癒されることはない。私の両親に対する追悼の意味からも、私に残された英語教育者としての人生をフルに生き抜くこと以外には、何も考えられないのが今の心境である。

- ・「感謝の心と笑顔を大切に」  
西条市・西条南中教諭 中川 典子
- ・「先輩から学んだこと」  
西条市・西条西中教諭 高市 翔太
- 先輩を偲ぶ……………(18)
- 林傳次先生遺稿集「把翠」を繙く(十四)
- 文芸……………(19)
- 俳句「愛大俳句研究会とは」
- 川柳
- 短歌「夫婦絶唱」  
加藤 厚生  
加藤 明子
- 俳画「春夏秋冬」  
山口 恭子
- 会員の声……………(21)
- 「担任のクラス会出席『至福』」  
小野植元幸
- 「升田栄先生を偲ぶ」  
吉原 宏文
- 支部だより……………(23)
- 「爆笑僧都寄席」  
南宇和支部長 若田 正
- 第十五回愛媛大学教育学部  
同窓会懇親会報告……………(25)
- 学内トピックス……………(27)
- ・教育学部留学生歓迎会を開催しました
- ・四国がんセンターで、教育学部の学生たちによるアウトリーチコンサートが開催されました
- ・教育学部の安積京子講師がドイツの音楽祭に招待され演奏しました
- 愛媛大学校友会をご紹介します！
- 叙勲・受賞……………(18)
- 寄付者・会報送料送金者名  
敬申……………(30)
- 原稿募集……………(29)
- 放送大学前期入学生募集……………(21)
- 第七回愛媛大学ホームカミング  
デイを開催しました……………(31)



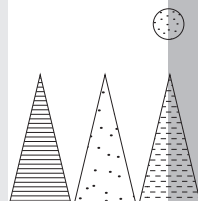
# 学部 の今



## 研究室 訪問

### 理科教育研究室

#### 隅田学教授 今日は



学校教育を取り巻く環境の急速な変化としてのグローバル化

一九九〇年、わが国に在留する外国人数は約百二十万人でした。それが二十一世紀を迎え、二〇一四年には約二百十万人を超えています。外国で生活する日本人の数も大きく変化しています。二〇一五年に、わが国の領土外に進出している日系企業の総数は



七万を超えており、この十年間で約二倍に増えているのです。

社会の急速なグローバル化と越境は、わが国の学校教育や教員養成に現代的課題を提起しています。平成二十三年度より小学校の高学年で必修化された「外国語活動」も大きな教育政策の転換です。国際協力機構が行ってきた青年海外協力隊や各種事業でも「教育」分野のニーズが非常に高いのです。

愛媛大学教育学部は世界の大学と国際交流を行っています。本稿では、特に私が中心に関わっているフィリピン大学教育学部との交流について紹介したいと思います。

### 愛媛大学教育学部とフィリピン大学教育学部との学術交流

愛媛大学教育学部は、二〇〇七年にフィリピン大学教育学部と学術交流協定を締結しました。今年で締結十年を迎えます。



フィリピン大学は、フィリピン共和国において最初に設立された大学であり、一九〇八年の設立以来、常にフィリピンの教育・研究をリードし続けている拠点大学です。

本学教育学部とフィリピン大学教育学部の交流については、海外教育実習プログラム、シンポジウム、教育視察団の受入、共同研究、留学生の受入と多岐にわたる活発な交流が行われています。日本学生支援機構等の助成も受け、これ

まで三百名を超える教職員・学生の交流実績があり、愛媛大学における国際交流の拠点事業として高く評価されています。

こうした活発な交流の背景には、フィリピンが東南アジアに位置し日本に比較的近いことや、フィリピン語と並んで英語が公用語であることがあります。加えて、愛媛大学大学院を修了した留学生在がフィリピン大学教員として活躍中であることや、愛媛大学にフィリピンの文化や歴史に精通した教員が存在することも本学の優位な特徴です。何よりも、フィリピン人は日本の外国人登録者数の第三位を占めており、私たちにとって大変「身近な外国人」なのです。

### アジアで教える、アジアの子どもから学ぶー愛媛大学フィリピン教育実習プログラムー

愛媛大学教育学部は、フィリピン大学教育学部と連携し、海外教育実習プログラムを開発、実践しています。「フィリピン海外教育実習」は、国際的な視野を持った教員の養成という現代要請に応える新しい教育プログラムであり、従来の国際貢献・協力とは異なる、互恵

的な関係を基盤とするグローバルな教育実習です。

フィリピン教育実習は、二〇〇七年にスタートし、これまで幼稚園、小学校、中学校、高校の各学校段階で、理科、社会科、算数科・数学科、家庭科、図画工作科といった幅広い領域の授業を行ってきました。参加する学生は、フィリピンの文化や歴史、教育事情を踏まえながら、英語を教授言語としてユニークな授業を開発し、フィリピン大学附属学校園において実践します。教育学部・教育学研究科はもちろん、理学部、工学部、農学部、法文学部からの学生も含めて、百六十名以上の愛大生がフィリピン大学附属学校園で授業を行いました。



様々な素材を用いて個性豊かな帽子を創作した小学校図画工作科の授業

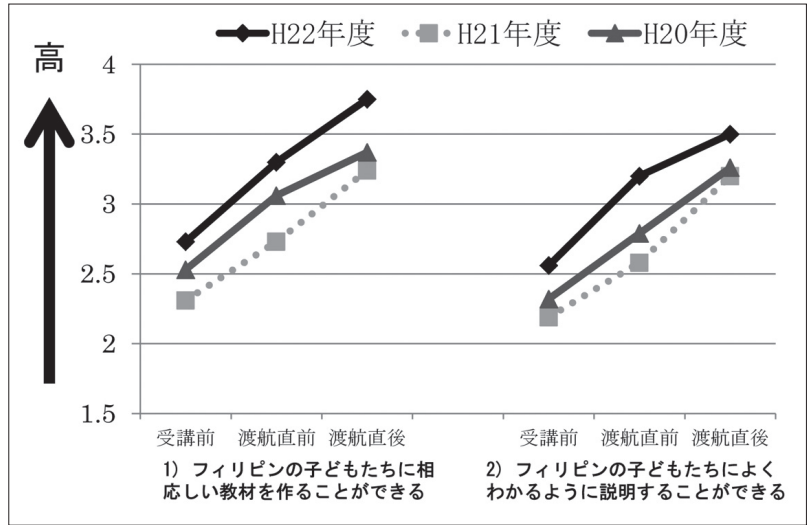


海外教育実習は、英語で授業を  
実践する活動が含まれますが、そ  
れは単なる語学研修でもなく、単  
なる文化交流でもなく、学部・大  
学院の学習内容を、教育現場を  
フィールドとして実践的に高度  
化・活性化する点に特徴がありま  
す。そして、専攻や学部を超えた  
学生グループで授業を開発・実践  
するのも意義です。



愛媛大学で開発された無細胞タンパク質合成キットを用いて高校生に DNA の授業を行う愛大生

**附属・地域の学校との連携展開**  
フィリピン大学との交流は大学  
生だけではありません。愛媛大学  
附属小学生は、フィリピン大学附  
属小学生とスカイプを使って交流  
を行っています。フィリピン大学  
の学生が本学附属中学生に特別授  
業を行ったこともあります。スー  
パードラゴナルハイスクール指定  
を受けている本学附属高校は、異  
文化研修として、現地でフィリピ  
ン大学附属高校生と交流します。



フィリピン教育実習を通じた大学生の「国際的な授業力」評定の変化

二〇一五年度からは、「愛媛大  
学科学文化キャンプ (EMICA  
A)」もスタートしています。県  
内のスーパーサイエンスハイ  
スクールの高校生とフィリピン大  
学附属高校生が、愛媛大学、愛媛  
県をフィールドに交流するプロ  
ラムです。二〇一六年度は、フィ  
リピンだけでなくタイからの高校  
生も参加予定で、今後のますます  
の発展が期待されます。



折り紙を用いた対称性に関する算数科授業



日本の高校生とフィリピンの高校生が愛媛の文化を学ぶ  
愛媛大学科学文化キャンプ (EMICA)



日本の高校生とフィリピンの高校生がチームになって  
科学の課題に取り組む愛媛大学科学文化キャンプ  
(EMICA)





# 大学生生活最後のチャレンジ



愛媛大学教育学研究科  
教科教育専攻二回生

富田 湧(平二八彦)

私は昨年より山形大学から愛媛大学大学院に進学しました。山形では地元今治で体感したことのない寒さと格闘しながらも、スキー合宿や幼児の体力測定事業、北海道自転車縦断の旅など、とにかく「動いて感じる」ことをしてきました。その行動力を生かし、大学院で挑戦したことが二つあります。その活動を報告したいと思います。

一つ目の活動は、私の地元今治で開催された、「バリチャレンジ・ユニバーシティ二〇一六」に参加したことです。バリチャレンジとは、「FC今治」のオーナーとして就任したサッカーの元日本代表監督の岡田武史さん(バリユニバーシティの学長)が開催したインキュベーションプログラムです。「FC今治のオーナーとして複合型スタジアムを構想し、今治を活性化せよ」というテーマのもと、日本全国から情熱をもった若者が今治に集ま

りました。与えられた課題は、次の三点です。

- 一、交流人口を増やし、スタジアム規模一万五千人を毎回満員にすること
- 二、施設・商品・サービスを組み合わせ、今治の新たな核を作ること
- 三、アイデアを導き出す、理念・ビジョン・提供価値を明確にすること

このことを踏まえながら、チーム八人(ファシリテーター一名、社会人一名、大学生五名、高校生一名)の全十五チームで、俺たちのスタジアムビジネスについて話し合い、最終日にはプレゼンテーションを行いました。私たち二班は、意見がなかなかまとまらず、中間発表では一番ダメ出しを食らってしまいました。時間内にまとまらなかった悔しさや長時間の話し合いによる疲労から、班の会話が減り、重たい雰囲気が出ていました。私自身も考

えていたアイデアや思いついたことは全て出し尽くし、もうこれ以上は無理と思うほど追い込まれた状態でした。

「とにかく動こう」

窮地に立たされた私たちでしたが、もう一度考えをまとめ直し、役割分担を決め、他チームのファシリテーターの方に助言を求めると、とにかく「動く」ことでアイデアを生み出そうともがきました。「動く」ことで不安を払拭していたと思います。それと、そのときの原動力になっていたのは、班の仲間と一緒に最高のプレゼンをしたい、中間発表での悔しさを何とか晴らしたいという気持ちでした。班の仲間とともに、夜中の三時まで話し合いが続きました。プレゼンテーションの日は、前日の夜に決まったテーマを基に、資料の作成と発表練習を何度も繰り返



返し行いました。私たち二班は、「今治の中小高校生がFC今治のスタッフに20+345日スタジアムに熱狂を生む」

をテーマに発表しました。今治市小中高校の授業プログラムと連携し、スタジアム施設を利用した授業を毎年実施するという提案です。スタジアム内に教室をつくり、図工の時間にタオル工場と共同でFC今治公式タオルを作成したり、家庭科の時間にはFC今治の栄養士さんの指導の下、選手の食事を提案したりするなどして、子供たちがFC今治のスタッフとして関わることで、今治を活性化しようという内容でした。発表前には、沢山の観客やカメラマンが集まり、一種の記者会見のような雰囲気が出ていたため、緊張に押しつぶされそうになりました。し



バリチャレンジの様子

かし、今まで一緒に活動してきた仲間や、応援してくださった方々のことを思い出し、この「緊張感を楽しんでいこう」とお互いに声を掛け合って発表に臨みました。結果はなんと学長賞！班の名前が呼ばれたときは、感動し、仲間とともにハイタッチをして喜びました。岡田学長と握手した瞬間、自分の人生が大きく変わる瞬間を感じました。バリチャレンジを通して、沢山の人の出会い、多くの刺激をもらいました。

「物の豊かさより心の豊かさ」  
岡田学長の言葉を大切にして、





これから今治をどう変えていくか、自分にできることは何かを考え、バリチャレンジで学んだことや感じたことを今後にかかしてきたいと思っています。

二つ目の活動は「矢野繁樹選手の伴走」です。私は今、陸上障がい者スポーツクラブ「愛アスリートクラブ」に所属し、コーチ兼伴走者として全盲の短距離ランナーである矢野選手と一緒に走っています。矢野選手は、パラリンピックに日本代表として三大会連続で出場し、二〇〇〇年のシドニー大会では四〇〇mリレーで銀メダルを獲得しています。きっかけは、ゼミの日野先生から「高校の時に陸上競技をしていた経験を生かして伴走をやってみないか」という



一言から始まりました。私自身、障がい者スポーツには興味を持っており、昨年、附属特別支援学校で風船バレーの授業を実践しました。また、初級障がい者スポーツ指導員の資格を取るなど、共生社会に向けた社会の動きにも関心をもっていました。伴走の話がきたときは、「このチャンスは今しかない！」と思い、すぐに連絡して練習を始めました。

全盲の視覚障がい者と走るときは、お互いの片手に伴走ひもを持ち、腕の振りや歩幅を合わせて走ります。また、どの方向に向かっているのかわからないため、必ず走る前に矢野選手の背後から肩の向きを合わせ、走る方向を定めてから走ります。走り方を教わり、初めて一緒に走った時は不安と緊張でいっぱいでした。

「本当に一本のひもだけで上手に走れるのだろうか」  
お互いにスタートの脚を揃え、



伴走練習

前傾姿勢をとり、矢野選手の合図でスタートしました。私はとにかく足を合わせることを意識して走りました。走りだしてみるとその不安や緊張は一瞬で消え、驚きと感動に変わりました。走り終わった後、私も矢野選手も息が上がり、お互いまだまだだと笑いながら初練習を終えました。矢野選手に不安や恐怖はないのかと聞くと、「不安や怖さはあるが、お互いを信頼して走ることが大切。とにかくまっすぐ走ること。心も体も二人三脚で走ることを大事にしよう」と教わりました。それからは練習だけでなく、練習後も一緒に行動することで積極的にコミュニケーションを図り、伴走者としての心得やコツを教えてもらっています。「最高の二人三脚」が目標になりました。

十月に開催された「第十六回全国障がい者スポーツ大会 希望郷いわて大会」では、立ち幅跳びと五〇m走に出場しました。立ち幅跳びや五〇m走は、音に向かって跳躍したり、走る競技で、今大会では介助者として参加しました。立ち幅跳びでは金メダル、五〇m走では銀メダルという結果に終わり、目指していた「五〇m走六秒台で金メダル」にあと一步届かず、とても悔しい思いをしました。初めての経験で、自分の介助者としてのふがいなさや後悔の念

もありましたが、今は矢野選手とともに、来年の愛媛大会に向け、「次こそは金メダルを取る」という気持ちで練習に励んでいます。

私は、矢野選手との関わりを通して、障がい者スポーツの面白さや共に生きる大切さを感じています。スポーツを通じて障がいの壁を越え、互いに助け合いながら喜びを分かち合っています。そして、矢野選手と関わることで初めて気



障がい者スポーツ大会の様子



づくことや学ぶことがたくさんあります。

「失ったものを数えるな、残されたものを最大限に生かせ」

これは、パラリンピック創始者のグッドマン博士の言葉です。失ったものばかりに目を向けるのではなく、今あるものをどう生かしていくかが大切です。私は矢野選手から、勇気と諦めない根性を学びました。

四月からは、愛媛県の中学校教諭になります。どんな状況であっても、自分が持つ能力を最大限に生かし、壁を乗り越え、関わった人たちに勇気と感動を与えていきたいです。大学院で経験し、学んだことを、これから関わっていく人たちに伝えて行きたいと思っています。

799-1514 今治市町谷甲  
二七〇一一



矢野繁樹選手



特別講義  
まちづくりのしくみと学び

### 地域課題解決を目指す 自転車旅行推進の現場から

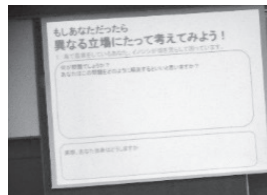
講師 NPO法人「シクロツーリズムしまなみ」

代表理事 山本 優子氏  
(平八卒)



【はじめに】  
しまなみ海道自転車旅行を推進している立場から、現在の地域に課せられた課題解決に向けた話をしていた。

「地方創生」と言う言葉をよく耳にするが、現状はどのように推進されているのだろうか。とりわけ、少子高齢化、地方の過疎化、が言われて久しい。この会場に出席されている多くの方は地域に就職される方が多く居ると考えられる。地域人材を育成する愛媛大学にあつては「地域にあつて輝く大



学」のキャッチフレーズをもって、とりわけ、教育学部にとつては次世代の地域人材を育成することに

強く取り組んでいる学部であり、その中で学ぶ学生にとって、地域にあつての役割は非常に重要になつてくる。今日の講義の中でどうしたら地方が元気になれるのか、私たちは今後どのように取り組んで行けばいいのか、そのようなヒントが豊富な経験に基づいたお話は非常に示唆に富んだ内容が隠されている。

今日の講師山本先生は、平成八年教育学部中学校教員養成課程体育科を卒業。その後教職に就かれ、二〇〇一年より、今治サポーターセンターで活躍されていた時に発生した芸予地震の直後から、「災害ボランティアセンター」を設置

し支援のコーディネーターをされていた。以降、町づくりの業務に取り組んでいて、二〇〇九年、五感をフルに使つて地域を丸ごと楽しむ新しい旅のスタイルを提案、その普及活動をされていて、「持続的な地域づくり」を目指して、NPO法人「シクロツーリズムしまなみ」を設立され、現在その法人の代表理事として活躍されている。

今日は、町づくりについて学ぼう。地域課題解決を目指す自転車旅行推進の立場からと題してお話をさせて頂いた。

#### 講義概要

今、私は町に関わる仕事をさせて頂いています

今日ここで紹介する、NPO法人「シクロツーリズムしまなみ」についてですが、皆さんよくご存じでしょうが「NPO」は「Non-Profit-Organization」非営利組織のこと、NPO法人「特定非営利活動法人」がありますが、此処にも雇用の受け皿があるということも一つの選択肢であることを知っておいてほしいです。

私はこのNPO法人で働いています。公益的な活動をする法人の中には、財団法人、社団法人などその受け皿によって名称が違います。

何故「シクロツーリズムしまなみ」の団体がNPO法人として設

立したか、何のためにその仕事をしているのか。

私は二〇〇九年にこの組織を立ち上げました。一般的にいうと「起業」という類に入るものです。皆様も将来どのようなところで働こうかなと思つた時、どのような受け皿の所に自分は身を置こうかと考えることと、その所がどの方向に向かっているのかを知ること非常に大切なことです。

「シクロツーリズムしまなみ」とは、「しまなみ海道」をフィールドにして「シクロ(自転車)」で、「ツーリズム(旅行)」を推進する組織、会社と考えて下さい。

このしまなみ海道は、今治市から六つの島を七つの橋で繋ぐ全長七十キロメートルの海の道です。この橋が国家プロジェクトとして開通したのが一九九九年、その頃は橋を利用した自転車の台数は少なかったのです。海峡を徒歩と自転車で渡ることが出来る大橋は、本州と四国を結ぶ三本の大橋の内この橋だけです、世界で唯一この「しまなみ大橋」だけなのです。愛媛にあつて世界に誇るべき橋です。この橋の特徴を生かす取り組みをしているのが私たちの組織です。

開通して十年後の二〇〇九年、日本経済新聞に自転車道第一位選ばれました。又、世界七大サイクリングコースにも選ばれています。日本人はこれまで、自転車は単なる移動手段としての認識が強

く自転車旅行する文化は根付いていません。

私たちが頑張つて起こしていることとしてるのは、自転車旅行なのです。自転車旅行する文化はヨーロッパでは盛んです。ヨーロッパでは数日かけて自転車でゆつくりと旅行する文化、このような自転車での文化をこのしまなみ海道で根付かせることが出来なかなと「イメージ」して、町づくりに関わろうとする時「イメージ」することは大変な大事なことであると痛感しました。私もこのNPOボランティアセンターで仕事をさせて頂いて、何が楽しいかと言えば、自分とは立場の違う大勢の方々との出会いがあるということです。

町づくりに関われることはそのようなことがあるからです。町づくりに関わっていると随分視野が広がってきます。それは、出会う人が多様だからです。私が最初にボランティアとして市民活動をしたのは、芸予地震(平成十三年)で復興に関わつて、全国からボランティアの方々が集まつてきてくれて、共に復興に携わっている時、困っている人々が、自分以外のことで関わってくれているが、どうしてこの人達は自分ならば何で困っているのかなとか、立場を変えて考えるという経験は、単に漫然としていると分からない事があるのです。しまなみ海道を自転車旅行をしていて、その土地



の人々と出会う時、島民の方達の立場に立ち、この人達は何でここが楽しいと思うのか、そこに住んでいる人は何に困っているのかについてイメージしていく。そのイメージのもう一歩先には、その人になりきってみる。つまり、「当事者意識」をもち他人事にはない。そのようなことを訓練する現場でもあります。このことは町への愛着を湧き起こさせてくれる魔力があります。

他人事としないで、その町のことを自分のこととして考えるようになる。その町が好きになって来ます。知らなかったことが一杯知れるようになつて来ます。あまり出会わなかった人にも大勢出会うようになり、このしまなみ海道の島民が一緒になってブランドを形にしてきたのが「しまなみ海道の自転車振興」です。中村知事も先頭に立って、自転車旅行を振興していこうと呼びかけています。

先進国では、今、環境に配慮型の町づくりをしていこうということ。で自転車を取り入れる国が非常に多くなつてきています。その中で画期的に取り組んでいる国も出てきました。その国の町



多くなつてきています。その中で画期的に取り組んでいる国も出てきました。その国の町

に行く、「自転車組み立て所」等があり、自転車を通しての町づくりを住民が立ち上げて取り組んでいます。

今、島なみに行く自転車台数が目を見張るほど急激に増えていて、橋の上で渋滞するほどになつてきています。今治市から大島を繋ぐ来島海峡大橋、そこに行く手前には「レンタルサイクルステーション」が設置されていて、ゴールデンウィークなどには多数ある自転車が貸し出されて、空っぽになつていきます。想像以上に人が訪れてきています。

一九九九年の開通時は凄く沸いていたが、しかし当時は自転車については余力を入れていませんでした。今はレンタルサイクルの貸し出しは年間十三万五千台を超えています。当時、年間の観光入込客数は二百万と言われていましたが、だんだんと右肩下がりになつて来て島の中で一番の問題は、橋がただの通過していただくものになつてきていました。即ち「通過型観光地」の問題となつてきていたのです。だから島への潤いはなくなつてきていました。正に通過型観光地になつてきてしまつて、平成十七年にはレンタサイクル貸出数も年間二万九千台まで落ち込んでしまつたのです。その年に私は活動を始めたのです。何故この年に活動を始めたのかと言えば、この平成十七年は「平成の大合併」の年でした。今

治市は十二市町村が大合併しました。これは日本で二番目に多い合併でした。その内の三つの島、大島、大三島、伯方島には併せて五つの町がありました。この五つの町が今治市と合併する時、この三つの島がどうしたら元気になるのかという勉強会を合併前から立ち上げました。この喘いでいた時に「シクロツーリズム」が始まりました。時代の潮流もあつて、今は年間十三万五千台のレンタルサイクルまでになつてい

ます。しかし、今は県外から入ってくる自転車は「マイ自転車」の台数が増えて、レンタル自転車利用台数が減少し、自転車愛好者のマイ自転車台数が利用全台数の内の七割を占め、正に逆転現象になつてきています。そして、今は年間三十八万台になつてきています。このことから、今、島の風景はガラッと変化してきています。毎日、自転車ツーリストの姿を見ない日はなくなつてきています。では、島の暮らしはどうなつてきたか。そこには「タンDEM自転車」は日本では使用禁止ですが、しかし今は全国八県で使用可能になつていきます。その内の一県が愛媛県です。私のNPO法人は県警に「タンDEM自転車走行」を許可してほしいと、規制緩和と請願書を二〇〇九年に提出しました。時代の流れに柔軟的に確に適応した改正であるのが法律でなければと

その時痛感しました。ところで、そこには確りとした理由がありました。それは、関西にある視覚障害者グループから「しまなみ海道を自転車で渡りたいのですがお手伝い下さい」との問い合わせが、私が法人役員になつた間もない頃でした。

タンDEM自転車は前に乗る人がパイロットになるので、後ろの人はいろいろなハンディを持つている人でも乗れる素敵な乗物です。NPOの活動は社会制度を変えていきたいなとする事案についても能動的に取り組めることがあります。

愛媛県には、「愛媛夢提案制度」という素晴らしい制度が加戸知事の頃から設けられていて、私達が夢提案すると、それを一生懸命考えてくれる部署があるのです。先程の提案でもすぐに動いて下さつて劇的な早さで規制緩和がされました。

自転車旅行の三つのポイント

- ・ 移動そのものが旅になる
- ・ 走る道総てが旅になる

以前、モニタリングをしようとして、愛媛を自転車とモニターツアーを呼びかけました。その出発前に、私達が独自にツアー計画を立て、まず出発点から目的地までの最短距離を考え、その沿線にある施設訪問、食事場所、休憩地等、ツーリストがきつと満足するであろうと考え作成し、出発前に渡しました。しかし、いざ出発す

ると予想に反し、どんどんと脇道に入っていく。「あの集落に行つてみたい。あの海岸通りを通つて造船所に行つてみたい。」と、どんどんとそれていくのです。このことに接して、私は目から鱗がおちる思いがしました。

そのことはアンケートからも強く感じました。アンケートには、「入つたこの道は楽しかった。ミカンの島は楽しかった。漁村の風景に感激した。大橋の上を走っているとまるで空を飛んでいる感じがして爽快感があつた。出会つた高齢者からミカンをもらった。」

これらのことから強く感じたことはこの自転車の旅は島の暮らしを守つて元気にする事に繋がると思いました。今あるこの道は楽しく、この道で出会う人々が温かくて楽しいと。この言葉こそ地域を元気にする元だと強く感じました。

又、平均して自転車ツーリストは路地が大変好きです。又、自動車で走れない所へも行つてみたいともよく言われます。そして、サイクルリストがいやがるのは国道、バイパスですね。しかし、その一つ入った旧道、遍路道を好みます。ゆっくりと旅する四国にはお遍路文化があります。だから四国に於ける自転車文化も、四国では大いに根付いていくものと確信しています。そこには大勢の方々の出会いが生まれてきます。その交流の中で地域が活性化してきます。



二〇〇五年から、「自転車モデルコース事業」を立ち上げ、五町の人々に集まって頂き意見交換をしました。その中で出てきたことは、「働く場所がない。少子高齢化で人口が減少している。伝統文化の継承者がいない。放棄耕作地が増えてきた。何事も担い手不足。瀬戸内海は海で元気になるのに、船便が激減して港町商店街もシャッター街に変貌してきている。橋が架かっても何もないことがない。メリットと言えば救急車が二十四時間走れるぐらいだ。」等、メリットはあるが、デメリットのほうが遙かに多いとの話が出てきました。また、「猪が増えてきて島は物騒になったと。学校も統廃合で少なくなってきた。総じて賑わいがなくなってきた。」このように沢山の問題が提示されました。そこで私達はそれらの問題に向き合いました。

ここで、会場の参加学生に三、四人の小グループになるように呼びかけた。

今、私から皆さんに問題を出します。それを次の三つの約束を守って、それぞれのグループで話し合ってください。

- 一、一人称で話す「私は〇〇と思う」「自分の気持ちを率直にだす。
- 二、自分の考えを絶対だと思わない。価値観をクリアにする。良い悪いと即断をしない。
- 三、価値観をクリアにする。当たり前とは思わない、善し悪しの判断をしないで、意見を総て取り入れる。

話し合いのフィールドを「島」として、皆さんは島民になった気持ちで立ち場を考え、グループ内で意見を交換して下さい。

問題一「皆さんは島で農業をしています。猪が島を荒らしている貴方、猪が島を荒らしている困っています。」

何が問題で、この問題をどのように解決していけばよいかについて、グループで話し合ってください。(グループに別れ話し合いをする) 回答者を指名する。

男子学生A「村の皆と協力して、全部の島に電流の通った柵を設置する。」

男子学生B「猪の肉料理を研究して、特色ある島の猪肉を売り出す」

問題二「貴方は村の長老です。今、村の伝統文化を伝承する若者がいなくなりつつあり、なくなろうとしています。貴方はこのことをどのように解決していきま

すか。」

(グループ討議をする)

回答者を指名する。

男子学生C「若い人を取り込む。そこで、若者の中でその影響力の高いSNSを活用し、その伝統文化の素晴らしさ、楽しさなどを伝えていく。又、その価値などをうまく紹介し宣伝する。」

また「他の地区との人々と連携していき、より規模を拡大していく。」

男子学生D「島根県の奥出雲にある『たたら村』のように、あの有名なEXILEによって映画『たたら侍』を制作発表して、『テーマパーク・たたら村』が紹介されているから、いろいろな有名な方々の協力を得て、復活させる。」

女子学生A「もうあきらめてもいいのでは。しかし、以前大学のゼミ生とその指導教官とが村とタイアップして伝統文化を復活させたことを聞いている。だから大学とタイアップして若い力を取り入れることにする。」

私達は、元気がなくなってきたいる農漁村をどのようにしていけばよいかと考えたときに、「自転車旅行者向けのお弁当を創ろうよ」とか「伝統文化が復活するた

めには、ガイドを養成して外へ伝えていこうよ。そして、寂しい、人が来ないというのであれば沢山残っている小さな店に特徴を持たせ、自転車でそこを巡っていくよ

うにしようよということ。「スローサイクリング協議会」を結成しました。

それは今まで三つの島がばらばらで考えていたのを一緒にして考え「しまなみスローサイクリング協議会」を立ち上げて、その方達と仕事を一緒にしました。マーケットを意識してターゲットを創って行こうと考えたマーケット分析をしました。今後島の方達が困ったなと思った事を解決していくためには、ターゲットを生み出すなければなりません。ターゲットを使ってくれるのは、私から見ると、自転車乗りの内でターゲットを絞ったときに、その時の方が何を考えているかを的確にする必要があります。例えばそのターゲットツアアの方が次のようなことを言っています。

- ・マップを作る
- ・トラブル対策をする。
- ・ガイドツアーをする。

このことを整えてくれたらしまなみ海道に人が大勢訪れてくれるのではないかとこの話が出てきました。この出てきた意見アイデアを島民が結束して取り組んでいったのです。

行ってみたいくなるように作ったマップで。脇道、路地を楽しみながら島を巡っている姿に、島の住民が他人に頼らず自ら考え、前向きの実行で町づくりをしている姿を見た思いがしました。又、このように町づくりに積極的に参加す

る人は、その地区内で不平不満を言う人に対して、積極的に関わり、町づくりについて共に歩んでいこうと具体的に語りかけ仲間になってもらうアグレッシブな行動が見られ、この力がより町を活性化していく事になっている姿に接して感動しました。

一緒に活動してきた島の高齢者が私にぼつと「自分らの願いが届いたなあ」と。これには私は強く感動しました。他人ごとにならず、行政任せにもしないで皆が一人一人主体的に考え実践していく場作りを通して、発展的な解決がなされていくものであるということを確認しました。

自転車旅行を支えていく仕組みとして「自転車旅行を支える重要な仕組みとして「自転車のためのサービスエリア」が必要になってきます。そのために「軒先」提供

の取り組みが住民の中から起きてきて、島の方の善意で作られた自転車旅行者がほっとする空間、今島には百二十一カ所「しまなみサイクルオアシス」が設置されています。そこには共通のパテストラリー、休憩所、空気入れや自転車

工具の貸し出し、ベンチ、給水所が設置されています。このことは愛媛県中にしまなみネットワークとして広がろうとしています。今二十カ所設置されてきています。また、島には自転車店がないので、バックアップしようという島の方々がパンク修理の技術を学ぶ講習会を



したりもしました。また、島には、トラブツた自転車のための「しまなみレスキューポイント、タクシー」ができています。そして、「しまなみ自転車旅の宿」を設け、自転車旅行者の宿泊地には、愛車を自分の枕元まで持ち込めるなど、安全な保管が出来るようになっていきます。これもしまなみならではのです。

伝統文化を自転車で巡る旅として、私達が推進しているものに「ガイドツアー」を組んで、今、文化財巡りツアーを実施しています。この中にはこの地域らしいこと、また異文化に触れたい方々を意識して、ルートの中に伝統的な体験、祭りの見学をする場所などを組み込んだり、暮らしを体験するツアーを組み込んで農業体験をしたりしています。

今、NPOで何をしているか。立ち上げてから何をしていますのか。

それは、二〇〇五年、二〇〇六年地方が喘いでいる時に、向き合った課題の解決のためでした。出て行って諸課題の解決をしているのが私達の法人です。仕事は、只単に観光客を増やしたい等というわけではなく、モニターの人の中にはこちらへ移り住んでいる人もでてきています。自転車旅行を選ばないに共通しているものに「地域を愛する心をもつ人」が多いことです。そしてこの人達は人と人を島の人たちと共に広げていき

ます。「ミカン食べといき」と今の時期ミカンをおすそわけしてもらうツーリストもいます。島の人、四国の人たちはとっても優しく温かい。

町づくりには、無いものを持つてくるのではなく、今あるものが原石なのだからそれを磨いていく活動が大切なのです。私達が描いている活動は、自転車を通して、自転車が増えることで船も復活したらいいな。自転車を通して皆が安全安心して楽しく遊ぶ姿が見える楽しい町安全な町にならないかなとかを願って町づくりをしています。

ポイントは終始言っています、「住民達自身で考えていく。他人任せにしない。其の人の立場に立って考えてみる。」このことはとっても大事なことです。大勢の方々の沢山の意見や日々外部から来る方々の意見も聞きながら改善努力し地域が元気になっていくことがしまなみ自転車旅行の魅力だと私は思います。

自転車旅行が今地域を変えようとしています。変えたとき何が起こってくるのか、出来ればやはり今の暮らしを守っていきたいですね。島はある意味限定的で限られた空間ともいえるが、そこには人と人との強いつながりがあったり、自然と人とのつながりがあったり、文化と人とのつながりがあったり、これらはとっても深く繋がり豊かな絆で結ばれていると

思います。それが無くなる事は寂しいものです。何かを解決しようとするとき、現象と問題は違うのでそれを明確にする必要があります。

しまなみで自転車旅行を推進しているのは只単に観光客を増やしたいのではありません。根底にあるのは町の課題というものがいくつあつて、それを住民自身が考えていく現場であることだということをお話しました。

最後に出席した学生からの質問を受ける

男子学生E「私は今日の話にもありました生口島出身です。帰郷すると、話にも出ていましたように、自転車ツーリストが激増していて、危ないなど感じることも多くなってきたのですが、それについての対策はどうしているのですか。」

回答「話し合いその対策をしています。島についてはその事情を考え、歩道を狭くして、車道を広げ自転車レーンを作るとかの道路の環境整備をしています。また、ヘルメット着用率を挙げています。そして規則にも配慮し、今愛媛県と今治市には『自転車安全の規則』と言うものが出来ました。そして安全対策には教育を変えていかなければなりません。小学校から交通安全教室の徹底指導です。このように、道路環境整備、教育、そし

て規則この三つが連動しないと自転車の安全走行は保たれないのです。この点は日本が先進国でもあります。」

女子学生B「起業されたときNPOと言うかたちを選ばれたのはどうしてですか。」

回答「私たちは、旅行を運営していたり、宿泊を推進していたり、物販をしたりしていて何等株式会社と変わらないようすが、然し、何故NPOを選んだかと言えは、もともと母体の「スローサイクリング協議会」があり、住民の方に集まって頂き、その方達をパートナーとして一緒に活動する。住民が関わって行く組織、このことは一般の株式会社では難しい、なので単にサービスを提供する組織です。住民参画型の運営をしたという事でNPO法人という形態を取りました。株式会社でも有限会社でも社会貢献は出来ますがNPOと何が大きく違うかと言えは、NPOは会員制度をもつことが出来ます。それと寄付金というものを集めて町の事を考えて動く乗物がNPOといえます。だから私達は町の事を考える住民から会費を集めていく形態を選択したこと、今は一般の企業から寄付をもらったりして町づくりを進めています。この収入源の違いは株式会社ではこの形は取れない。株式会社は基本的には株式配当を目指し



て運営している株主さんは株を買って儲けたものを配当してもらう。然しNPOは配当は禁止されている。つまり集めた資金は町のために使いたいその形態を取るために、また、関わる人を多く増やしたいと思いNPOを選びました。会社というものは乗物のようなものです。その乗物がどちらの方向に向かって動いていくかの選択は会社のもっている性質なのでそれを勉強すればいいのです。皆さんもこれからの進むべき道について考えるとき、このような視点を配慮していつてください。



# 学部最近のニュース



## 科学イノベーション挑戦講座受講生が ジュニアサイエンスリサーチミーティングで 最優秀賞を受賞しました

科学イノベーション挑戦講座は、国立研究開発法人科学技術振興機構の次世代科学者育成プログラム事業として四年目の実施になります。

今回、大分県のホルトホール大分で開催された日本科学教育学会第四十回年会のジュニア・サイエンス・リサーチ・ミーティングに、藤川皓生さん（本学附属中学校三年生）、中西優奈さん（久米中学校二年生）の二人が参加しました。昨年度、科学イノベーション挑戦講座で、他の中学生たちと一緒に進めてきた「デンブンの加水分解反応を利用したおいしい甘酒と水あめづくり」のポスター発表をしました。

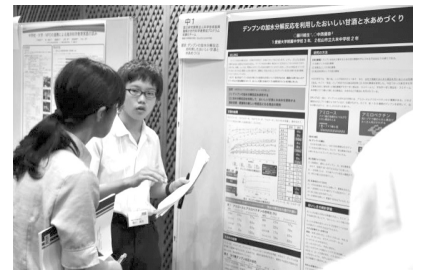
デンブンの加水分解反応は、小中学校ではだ液を使って行います。しかし、デンブンを加水分解するのは、だ液だけではありません。デンブンの加水分解は、食品

をつくる方法としても使用されており、日本では味噌・しょう油・清酒などがデンブンの加水分解で作られています。これらの食品を作りだすときに使うのは、麹菌と呼ばれる菌です。麹菌は、だ液と同じようにデンブンを加水分解する消化酵素、アミラーゼを持っています。

そこで、私たちはデンブンの加水分解とその産業的な利用につ



最優秀賞受賞



中学生による発表

て研究するため、麹菌から取り出したアミラーゼなどの消化酵素を使って、おいしい甘酒と水あめづくりの研究を行うことを計画しました。この中で用いるデンブんにふくまれる食物繊維の量が、水あめの粘り気に影響すること、甘酒をつかったイチゴ甘酒ゼリーとみかん甘酒ゼリーがもつともおいしい評価を受けたことを発表しました。おもしろさは個人の好き嫌いがありませんが、たくさんの人に食べてもらいたいことを統計的に考えることで、誰にでもおいしい商品の開発をしています。イチゴ甘酒ゼリーとみかん甘酒ゼリーは、すべての評価者がほぼ最高点をつけるとてもおいしい商品に仕上がりました。

本内容が審査委員による審査の結果、中学生の部で最優秀賞を受賞しました。藤川さん、中西さんは、今年度それぞれ別の研究テーマを熱心に進めていますので、今後の活躍にご期待ください。

## 教育学部の学生がえひめ科学特別授業を 実施しました 【七月三十日(土)】

平成二十八年七月三十日(土)、愛媛県教育委員会が主催する理科体験授業「えひめ科学特別授業」で、教育学部理科教育講座が実施している「理科観察実験体験プログラム」に参加している学生が授業を行いました。このプログラムは、小学校教員を目指す学生が、先生役と児童役に分かれて教え合うことで、学生の指導力向上を目指しています。今回は、教育学部四回生の新田紗瑛さんが中心となり、濱口愛美花さん（教育学部四回生）、富田享さん（教育学部三回生）、中川瑠奈さん（生活環境コース二回生）、丸山夏穂さん（生活



大学生による光の秘密の説明

環境コース二回生）、山本真琴さん（生活環境コース二回生）、安平奈央さん（生活環境コース二回生）が参加しました。

授業では、愛媛県内の四・五・六年生三十七人を対象に、「光の秘密の解明するDVD分光器の作成と光の観察」を行いました。まず、工作用紙を切りぬいた箱を作り、DVDを貼り付け、光を分ける装置を製作しました。使い慣れないカッターに苦戦しながら、子どもたちは自分だけの装置を製作していききました。この装置は、隙間から光が入ると分光される光がうまく見えないため、大学生や保護者に手伝ってもらいながら隙間をしっかりと止めました。

そして、製作したDVD分光器をつかって太陽・蛍光灯の分光を行いました。太陽は、七色の光が帯になって見えるのに蛍光灯はいくつかの光が筋になって見えます。同じ白色光でも違って見えるのはなぜなのかについて、子どもたちは考えました。

また、白熱灯と白色LED光についても観察しました。白熱灯と白色LED光も太陽と同じように七色の光が帯になって見えます。





紫色のLEDの光はどうして青色と赤色に見えるのだろうか？

では、太陽と白熱灯と白色LED光は同じ原理で光っているのでしょうか。それとも違うのでしょうか。さらに色を変えることのできるLED光で、赤・黄色・紫色の観察をしました。赤は、ほぼ一つの色に見えますが、黄色は青と緑、紫色は赤と青の二つの光が同時に見えます。これは、LEDの発光素子が、赤・青・緑の三色で、さまざまな色を三つの光の強弱で表しているからなのです。児童たちは、一生懸命工作と実験に取り組み、光の謎について考えを深めました。

今後、「えひめ科学特別授業」は、小学生対象一回、中学生対象二回で行われる予定です。

本プログラムは愛媛新聞七月三十一日朝刊「光の秘密わかった！」で報道されました。



DVD分光器で蛍光灯の光を見てみよう

### 松山市「ことばのちから事業」に賛同した教育学部音楽専攻生が「正岡子規のふるさとシンフォニー」を演奏

松山市は「ことばを大切にす  
まち・松山」として全国に情報発信するために「ことばのちから実行委員会」を組織し「ことばのちから事業」を推進しています。「俳句甲子園全国大会」や「響け!! 言葉」ことばのがっしょう、群読コンクール」などがよく知られていますが、昨年度からの新規事業として「正岡子規のふるさとシンフォニー」のPRを行っています。

この「正岡子規のふるさとシンフォニー」は、正岡子規の俳句に

メロディをつけて欲しいという依頼を受けた新井満氏が制作し、昨年六月に発表されたものです。「ことばのちから実行委員会」では、この曲を演奏した動画を公開してくれる出演者を募集しています。

平成二十八年六月一日(水)、教育学部音楽専攻生の有志が、教育学部内のピアノ練習室で演奏し動画を収録しました。演奏しているのは、芸術文化課程音楽文化コース三年生の久保田瑞季さん、白川紗弓さん、畠中結愛さん、坂東晴妃さん、檜垣友希さん、松木わかなさん、吉田桃子さん、そして、学校教員養成課程中等教育コース音楽教育専攻一年生の古和田美友さん、白木菜々子さん、平井智香さん、室津優希さんの十一人です。

各自が専門的に学んでいる声楽やピアノ、クラリネットの技能を生かすため、合唱・ピアノ連弾・クラリネットとエレクトーンの三つの編成にアレンジし演奏しました。

この日は、三年生と入学したばかりの一年生の共演で、練習の時から和気あいあいの雰囲気でした

が、さすがに演奏の時は真剣な表情になっていました。収録が終わって学生たちは「自分たちが学んでいる音楽を通して、地域の事業に参加できたことがうれしい。」「多くの人に、この曲を聴いてほしい。」と話していました。

この日収録した動画は、「ことばのちから実行委員会」のホームページで公開されています。

[http://www.kotobanochikara.net/kotoba\\_sikutah.html](http://www.kotobanochikara.net/kotoba_sikutah.html)



ピアノ連弾演奏



クラリネットとエレクトーン演奏



合唱の様子

# 職場だより



## 思い出の 山越グラウンド



内子町  
天神小教諭  
高田 明知  
(昭六〇卒)

先日、十数年ぶりに準硬式野球部の集まりを行った。約三十年前に山越グラウンドで、共に汗を流した旧友たちとの再会である。参加者は全員教育学部出身で、奇遇にも大洲市喜多郡で教壇に立っている中年限定の七人である。(正確に言うと今春退職した同級生を含んでおり、彼の慰労を兼ねて集まった。また、一名欠席者がおり、実質七名で合っている。)

最初は私が貧乏野球をしていたときの同級生や後輩が、なぜか大洲市喜多郡にいたので一回集まって飲もうかというものであった。言い出しつべなので案内状を送り、名前をつけ「山越会」とした。もちろん山越グラウンドを懐かしん

での命名である。来る日も来る日も白球を追い求めた聖地である。ちなみに、我々準硬(じゅんこう、準硬式野球部の略称)は硬式野球部と一緒に練習をしていた。打撃練習は三ヶ所で、バッティングマシーン我真ん中に置き、一日おきに使用するというアットホームなシステムであった。

しかし、守備は混合であり、運が悪ければ硬式の強烈な打球が飛んでくる。ちらつと前述したが、私はあまり豊かではなかったために高校時代に買ってもらったソフトボール用のグラブを使用していたため、準硬の球でも痛いのに、硬式の球なんか凶器であった。いかに痛くないように処理するか、これが意外と私の技術向上に貢献するのだが、最初はそんなこと知る由もなく恐怖だった。

ここで、準硬式のボールについてほとんどの方が御存知ないと思われるので説明したい。トップボールというその球は見かけは軟球である。しかし、硬式球と同じように芯があり、糸を巻いた代物

である。皮で縫い付ける代わりにゴムという若干悲哀に満ちたボールなのだ。当たれば猛烈に痛い。(ちなみに私は公式戦で頭に死球を受け、試合後一人で病院に精密検査をしに行った。さらにちなみに、死球で一塁に歩いた私に盗塁のサインを出した主将の顔を今でも忘れない。)このようなボールを使い私達は勝利を目指したのである。

ついでにもう一つ。大学野球の軟式野球は準硬式野球なのである。月日が流れ現在のことは知らないが、昔は正統で、正式な体育会系運動部であった。それが示すように、山越を使えるのは硬式と準硬とソフトボールであった。これが、三つの部の中で一番結果は出なかったがブライドであった。

そんな愛大準硬式野球部であったが、私が一回生のときには全国大会に出場した。後に四年間で唯一となる全国の地は、静岡県伊東球場であった。あの読売ジャイアンツが地獄のキャンプを行った場所である。生涯G党の私は、その頃すでに西本や江川と同じグラウンドに立てることで幸せに満ち溢れていた。入場行進のパネルは今でも大切な宝物である。このパネルには名前と出身高校

も書いてある。私は大洲高校なのでそれほど威圧感はない。しかし、先輩にはビッグネームが名前の横に書かれている人もいた。石川県の星〇高校、兵庫県の報〇学園である。当時の愛大準硬式野球部は、高校時代に野球がしたくてできなかった人達が入部する傾向にあり、私を含め意外と初心者であった。先ほどの二人の先輩もそうであったが、大会要項を含め相手をびびらせたに違いない。試合は勝っていたのに雨天再試合となり、翌日負けた。思わず一泊増えてしまい、宿泊代確保のため家に電話を掛けていた人が多かったことを覚えている(自分も)。

翌年以降、南予出身が多く入部し、大洲弁がグラウンドにこだましていった。大学から山越までの道中は、みんなバイクを刑事ドラマのように走らせた。(今では考えられないが) 神聖なグラウンド内を禁煙にした。山越での合宿は報〇出身の先輩の寝言が素敵だった。

私はあこがれの伊東球場でランナーコーチとして立てたのであるが、その後後輩達に同じ思いは

させてあげられなかった。今でも残念な思いがある。

しかし、もう一つの大きな夢を叶えて教壇に立つ私達。練習で鍛えた大声は何かと役に立つ。中学校勤務では間違いなく野球部の顧問となり、それぞれの経験を生かし指導に励む。夜はナイターソフトを未だにやっている。そんな面々が集う「山越会」。あの時のあの話で酒が進む。こんな楽しい一時、私が野球をしていたと見かけから信じない子どもたちに話したい。

☎ 795-0081 大洲市菅田町菅田  
甲三二五〇一一



第14回 全日本大学選抜準硬式野球大会



教員採用試験と私



西予市 城川小教諭 横田 省吾 (平一五卒)

最近、松山に行き、愛媛大学の近くを通ることがあります。私が通っていたころは十五年ほど前。そのころとは、建物が変わっているなど感じます。

私の学生時代の思い出は部活です。アメリカンフットボール部で、大きい男たちやよく働くマネージャーさんたちと過ごした日々を覚えています。四回生の時、目標にしていた広島大学に勝った瞬間などは、今でも鮮明に覚えています。このメンバーとは、部活だけでなく、多くの時間を一緒に過ごしました。楽しいメンバーだったので遊びすぎた面があり、もう少し勉強しておけばよかったという後悔もあります。

そんな学生時代、大学四回生の時に初めて教員採用試験を受けました。今思い出してみても適当に

受験していたと反省するほどです。みんな受けるので、自分も受けてみようかなという感じでした。もちろん不合格でした。

採用試験に落ちた私ですが、あまり落ち込むことはありませんでした。私には、就職する前にどうしてもしておきたいことがあったからです。それは、「フリーター」です。特に警備員に憧れていました。大学卒業後、職がない私は、すぐにアルバイトを探しました。見つかったのが競輪場の警備員でした。駐車場の出入りを案内したり、競輪場内の警備をしたりします。警備員以外にも居酒屋で皿洗いやみかん農家の手伝いなど、フリーターを満喫していました。

そんな時、私の携帯電話に一本の電話がありました。「野村小学校で教育活動指導員をしないか。」という内容でした。せっかく誘っていたいただいたのもご縁と思い、お願いしました。

野村小学校では、二年間務めさせていただきました。一年目は教育活動指導員、二年目は生活支援員でした。五年生、六年生と持ち上がって副担任をしました。初めての学校での勤務で戸惑いはあり

ましたが、なんとも楽しい日々を送ることができました。この二年間で私は少し考え方が変わったように思います。一言でいうと「学校ってこんなに楽しいんだ。」と再確認したことです。もともと学校へ行くことが好きだった私は、子どもたちと一緒にいるような活動をすることがとても楽しかったです。

授業をしても休み時間に一緒に遊んでも楽しいのです。「本気で学校の先生になろう。真剣に採用試験を受けよう。」とスイッチが入りました。学生時代に遊んでばかりでろくに勉強もしていなかったのが、なかなか大変でした。放課後の教室で勉強し、家に帰っても勉強し、物覚えの悪い私は、ただひたすらノートに言葉を書いていきました。野村小学校に勤務中、二回の採用試験を受けましたが、どちらも不合格でした。先生への道はそんなに簡単ではありません。

次は、愛南町の学校で講師をしました。初めての担任、初めての複式学級を受け持つことになりました。分からないことだらけです。複式学級の授業には「わたり」というものがあります

が、私は、いつも「綱渡り」状態でした。それでも、学校で子どもたちと様々な活動をし、先輩の先生から多くのことを学び、地域の方とかかわることは、やはり楽しかったです。やっぱり先生になりたい。採用試験に落ち続けていた

ですが、やる気だけは誰にも負けてない、そんな小さな自信だけはありました。講師一年目も採用試験不合格。そして、二年目、これで、六回目の教員採用試験でした。相変わらず物覚えの悪い私は、問題を解いてはノートに書くことを繰り返していました。面接の点数の割合が高いため、面接練習もしました。校長先生にもお願

いして、場慣れするために練習を重ねました。もともとはずかしがり屋でしたが、面接練習を通して、少しずつ人前で話すことに慣れていきました。そして迎えた一次試験。筆記試験も面接試験もまずまずの出来でした。合格発表の日、自分の番号があるのかドキドキしました。毎年ですが、この瞬間が一番怖いのです。インターネットで番号を探し……、「あつた！」初めての一次試験合格でした。二次試験も合格し、ようやく

先生という職業に就くことができました。

小学校時代に書いた私の作文で今でも覚えている文章があります。「将来の夢はありません。どんな職業についているかも分かりません。でも後悔しない人生を送りたいです。」というものでした。将来の夢がなかった私ですが、無事、その夢を見つけることができました。

振り返ってみると、私が先生を目指すきっかけになったことは二つあります。一つは、野村小学校へ誘っていただき、子どもと接する楽しさを知ったこと。もう一つが、教育実習での恩師との出会いです。とても温かい先生で、「こんな先生になりたい」と、心から思いました。これまでに出会った全ての方が今の私をつくってくれているのだと思います。やはり、学校の先生になってよかった、諦めずに採用試験を受けてよかったと思っています。

小学校の頃の私へ、「後悔しない人生を歩んでいます。」

一期一会



愛南町  
柏小教諭

エルマン祐子  
(平一卒業)

私の座右の銘は「一期一会」である。卒業の日に子どもたちに送る言葉もいつも決まってこれである。

私は六人兄弟の末っ子である。一人っ子だった父はたくさん子どもがほしいと願い、たくさん子どもを作ってくれた。おかげでこの世に生を受けることができた。ここで、一人っ子だった父とその思いを受け入れた母との出会いに感謝。

幼少時代は楽ではなかったが、何とか中学生になった。中学三年生の時、クラスの友達が少しくれていた。そんな友達を見て、「法務教官になろう。」と夢を持ち始めた。少年院に行った人たちを何

とか立ち直らせたかと思ってい  
た。その時の担任の先生は今で  
う熱血先生だった。学校に來な  
生徒がいた。道德の時間はみな  
でその生徒の家にいった。その  
徒の家で道德の授業をしていた。  
卒業式の日、その生徒は学校に  
なかつた。もちろん、三年三組  
卒業式はその生徒の家の庭だ  
た。そんな先生の思いに、「少年  
院に入つてからでは遅い。入ら  
ないようにすればいいのだ。」と、  
教師を夢みるようになっていた。  
今、教師である私がいるのは、  
この恩師との出会いのおかげで  
ある。

暇に受からず、講師をしていた頃、  
「家に机はありますか。」と校長  
先生に聞かれた。ないと分かる  
学校の灰色の机を住宅に運んで  
くださった。教頭先生は音楽が得意  
で、短調でも長調でも使える曲を  
作曲してくださった。人権・同和  
教育主任は、出そうな問題をま  
めてくださった。その夏、教員採  
用試験に合格することができた。  
この出会いもなければ、今頃、ま  
だ講師をしていたかもしれない。  
夢の教師一年目の勤務校は母校  
であった。新しく七名の先生が赴  
任した。その中の一人にあの恩師  
がいた。恩師は何一つ変わらず、  
あの恩師のままであった。児童に  
も同僚にも誰にでも平等に全力に  
接する姿は神業である。あまりの  
忙しさに夜の廊下でそのまま寝  
てしまったこともあるそうだ。出  
会いは本当にすごい影響力だと  
思った瞬間である。

子どもたちは誰が学級担任になる  
のかわくわくどきどきしている。  
そして、学級開き。子どもたちは  
少し緊張して先生の話を真剣に聞  
いている。他の先生の方がよかつ  
たと思つている児童もいるかもし  
れない。しかし、三月にはこのク  
ラスでよかつたと思えるように、  
新しい出会いに今年もがんばろう  
と私はいつも新鮮な気持ちにな  
る。教師になつてよかつたと思  
う瞬間である。

のだとつくづく感じている。  
出会いで人生はどんなにでも変  
わる。だから、子どもたちに今ま  
での出会いの一つ一つ、それから  
新しい出会いの一つ一つを大切に  
してほしいと思う。だから、これ  
からも「一期一会」の言葉を送り  
続けていきたい。

〒798-4121 南宇和郡愛南町

御莊深泥三九一五





### 感謝の心と 笑顔を大切に



西条市  
西条南中教諭  
中川 典子  
(平二二卒)

私にとって教員という職業は、たくさんのお会いを与えてくれる魅力的なものです。講師経験を含めると、現在勤務している学校で四校目となります。たくさん先生の先生と子どもたちとの出会いがありました。そんな中、私は「いつも楽しそう」とか「いつも幸せそう」と声を掛けられることがありますが、しんどい時もあるのですが、周囲からこのように言われると何だか嬉しく、幸せな気分になります。幼少期から今日までのたくさんの方との出会いが、今の私をつくってくれているのだと心から感謝しています。

私は四月から、三年生の学級担任をさせていただいています。クラスの学級目標は「元気！勇氣！やる気！sexyさ！満点！のりちゃんクラス」に決まりました。みんなで理想のクラスを発表し合い、考えて決まった学級目標です。学級開きの時に、私は子ども

もたちに次の三つのことを伝えました。

一つ目は「何事も全力で取り組むこと」です。学習、行事、委員、係りの仕事など、最高学年として後輩のお手本になろう。そして、自分が後悔しないために何事もみんなで全力を出し合って取り組み、最高の思い出を作っていこう！と約束しました。

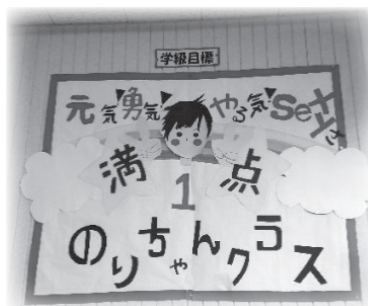
二つ目は「友達を認め合うこと」です。人には得意なことあれば苦手なこともあります。クラスの仲間でお互いを認め合い、助け合うことのできるクラスを作ろうということです。

三つ目は「当たり前のことが当たり前前にできる人間になろう」です。西条南中学校には当たり前のことが当たり前前にできる「普段着日本一」というスローガンがあります。これをクラスでも目標に掲げました。気持ちの良い挨拶ができる、正しい服装で生活できる、友達が嫌がることをしない、自分の役割に責任を持ちやり遂げる、清掃を一生懸命行うなど、ごく普通のことですがこれらを徹底していこうということでした。

そして、これらを達成するために私自身も目標を立てました。まず、日常生活を通して一人一人の生徒理解を図ることです。小さな変化を見逃さず、成長したところ

や頑張っていることを積極的にほめるようにしています。また、少しずつルールズになっていく生活をその都度声を掛け、気づかせるよう意識しています。そしてもう一つ、新学期から毎日続けていることが教室環境を整えることです。一日の終わりに、必ず教室の状態を確認するようにしています。乱れている机と椅子を整頓し、落書きがされているものは全て消し、置き勉のチェックをすといった感じです。

高校時代、恩師に言われた言葉に「環境は人を変える」という言葉があります。教室環境を整えることで学習にも集中して取り組むことができ、人間関係もよりよく築いていけるようになることを信じ、毎日欠かさず続けています。机の落書きには生徒の気持ちも表れていることもあります。以前、友達に対するからかいの言葉が書かれていることがあり、次の



日にクラスに対して話をするということもありました。何気なく書いた言葉だったかもしれませんが、これで傷つく人がいること、みんなにとって居心地の良いクラスを作っていこうと話しました。最近では、意識して机を整頓してくれる生徒が見られ、落書きもなくなりつつあるなどの変化が表れています。

昨年度、一年間の初任者研修を通して、私が生徒と接する時に意識していることは「生徒は教師の鏡」ということです。生徒の言動には私の関わり方が大きく影響を与えていることを忘れず関わっていきたいです。今の私の目標は、子どもたちを周囲の方への感謝の気持ちを持って、最高の笑顔で卒業させることです。そのために、「生徒は教師の鏡」という言葉を心に留めて、日頃から生徒にも感謝の言葉を伝えること、笑顔で生活することを心掛けていきたいと思っています。

たくさんの方々を支えていただき今の自分があることに感謝し、これからも全力で目の前の子どもたちと関わっていきたいと思

799-1364 西条市石田  
六六四一一

### 表紙作品について

○作品タイトル

### 「SUBUNE(碎)」

作者

宮川淳一郎

(水田)

(昭三九卒)



宇和島の偉人、社会教育者「森岡天涯」縁の、昔昔奄美大島より漂着したと伝えられている丸木舟(SUBUNE)を題材に約十年間制作を行ってきた。船の祖形である丸木舟の素朴・単純で力強く、プリミティブな造形美に魅せられて、形式的・情性的に陥らないように様々な工夫を重ねながら、抽象的表現によって絵画・彫刻を制作している。

本作品は、七十二年前の宇和島大空襲などの災難も経験しながら齢を重ね、刻々と風化している丸木舟の姿に慈しみと愁いの気持ちを抱きながら制作したものであるが、今後も、人まねに非ず、の「非」をモットーに造形活動を続けていくつもりである。

### 略歴

昭三十九年  
愛媛大学教育学部卒業  
平十一年  
宇和島市、北宇和郡小中学校勤務後退職。以後、フリーで造形活動中。

798-0012 宇和島市和霊町  
一八五三一

# 先輩から学んだこと



西条市  
西条西中教諭  
高市 翔太  
(平二二卒)

私は、今年で教員生活二年目を迎えた。講師としての三年間も含め、生まれてからずっと松山で生活した自分にとって、初任として赴任した西条市は初めての場所

で、まだまだ慣れない事も多く、日々四苦八苦しながら教員生活をスタートした。最初

は校区内の地理も分からず、先輩の先生方や子どもたち、時には保護者の方まで道を尋ねたり、地域行事の確認をしたりしたのを覚えている。当時のことについてはそれこそ本当に感謝の一言としか言いようが無い。

出される。何はともあれ、新天地での教員生活がスタートしたのである。

初めてもつことになった部活動は、卓球部だった。

「やった！」卓球部をもつように言われた時、正直心の中でそう思ったのを今でも覚えている。なぜなら、私はずっと卓球を続けており、指導者でありながら、プレーヤーとして今でも社会人選手権に出たり、公認審判員をするなど、卓球という競技に関して少し自信があったからだ。

また、講師時代には、副顧問ではあったが生徒の練習相手を務め、子どもたちと共に全国大会も経験することができた。「今度は自分が顧問として、子どもたちを全国に導く番だ。」

内心そんな思いがあった。しかし、現実はその甘くないことを、私は思い知ることとなる。

西条西中学校の女子卓球部の生徒は真面目で、練習にも一生懸命取り組む生徒が多かった。顧問となつて初めての総体に向け、熱心に練習する日々が始まった。子どもたちは日々、熱心に練習

に取り組んだ。しかし、なかなか結果の出ない日々が続き、気が付けば、総体の日を迎えた。結果は残念ながら団体戦地区予選敗退、個人戦でもダブルスが一組、県大会に駒を進めるに留まった。ここから、自分の何がいけないのか、模索する日々が始まった。

二年生の新チームになり、これまで以上に自分のモチベーションは高くなった。最初は上手くなりたという気持ちがあり感じられなかった生徒も、日々の練習や試合を通して、少しずつやる気が見られるようになった。しかし、

まだあと一歩、何かが足りないという感じのまま、気が付けば一年目が終わろうとしていた。「このままじゃ駄目だ。」

「なんで上手くないかない？」  
「どうして……」  
そんな後ろ向きな言葉ばかりが自分の脳裏をかすめ、そして気が付けば口に出していた。そんな時、ある言葉を思い出した。

「真摯に、前向きに」  
講師時代の先輩の先生が口にしていた言葉である。その先生はどんな時も、物事を前向きに考え、状況を冷静に判断して行動できる先

生だった。

「自分もこういう先生になりた

い」  
と思いつきながら仕事をしたので今でもよく覚えている。

そんな先輩とは違い、この頃の私は後ろ向きな言葉ばかり生徒に投げかけていた気がする。

「生徒が頑張ろうとしているのに、自分がこのままじゃだめだ。」  
「初心にかえって、前向きに生徒に向き合おう。」

そう思うようになってからは、少しずつ試合でも勝つことが増えてきた。生徒の表情も明るくなり、練習や試合でもしっかりと声を出して、雰囲気も良くなってきた。

それまでは、無意識に成果を出すことばかり考えていたため、気持ちも空回りして、部活動の練習でも、つい檄を飛ばすことが多くなっていた。しかし、意識的に生徒に前向きに向き合うことで、

チームの雰囲気だけでなく、やる気も向上し、良い結果を生むことができるようになった。

このときの教訓のおかげで、今では前向きに、粘り強く生徒に向き合うことができるようになったと思う。

結局、二年目のチームの最後の総体は三位で予選敗退となり、生徒共々、涙を飲むこととなった。しかし、彼らと過ごした日々や、先輩の言葉があったからこそ、今の自分があると思う。だからこそ、私はどんな時も「真摯に、前向きに」生徒と向き合える先生でありたい。

そして、生徒と共に、いつかは「全国出場」「全国入賞」という目標を達成できるよう、誰よりも自分に厳しく、前向きに努力していきたい。



\*写真は団体戦のようす

793-0044

西条市古川

甲三八一一





# 先輩を偲ぶ

林傳次先生遺稿集

## 「把翠」を繙く(十四)

### 「巻頭言」集 『愛媛教育誌』より

#### 【心身更正の時期】

夏季休暇が来る。夏季休暇が果して必要欠くべからざるものであるか否かは、人によつて意見を異にする所であるが、制度として存置されてゐる以上、これを最も意義あらしめる様に活かさなければならぬ。一日四五時間の授業とその準備、成績物の処理、更に加ふるに、補習学校や青年訓練所男女青年団の世話。小学校教師の日常はあまりに忙しい。従つて落ち着いてある特殊の問題について研究する時間や、心の糧ともなる書物に読み耽る暇とは殆どないといつてよい。纏まつた時間さへあつたら。これは精神的の欲求を胸一つばいに持ちながら忙しい毎日／＼を送らねばならぬ境遇にある人なら誰しもならず嘆声であらう。夏休みはまさに、其の願の満される時なのである。講習も可、読書も可、見学も可、出来る限り精神の栄養を豊にする計画が必要である。

忙しい日を送るものは、心の荒

#### 「愛媛教育誌」より

む如く身体も亦荒み易い。一年間の疲労を回復して、更に来るべき一年の為に、充分の活力を貯ふる事が肝要である。

健康の十分ならざる事は——特に教師に取つては一つの罪惡とも考へられる。水泳可、登山可、健康増進の為に夏休みを利用することを忘れてはならぬ。要するに夏休みを吾々教師の心身更正の時期として善用する事に努むべきで、かつ不規律なる生活をなしたるため、却つて心身を消耗せしむるが如きは、思はざるも甚だしきものといはねばならぬ。

(昭和六年七月号)

#### 【恥づべきこと、恥づべからざること】

孟子の「羞惡の心なき者は人に非ず」の語を掲げて、大川周明氏は「人間と動物若くは他の一切の存在との弁別を付ける為に、色々の点を挙げる事が出来ませうが、タツタ一つで人間と他のものとを分つべき特徴があるかと問はれる

なら、私は、『恥を知る心の有無である』と答へたい」と述べてゐられる。まことに恥を知る心こそは、我々をして他の生物と峻別せしめる重要な契機であり、更にこの感情を長養すれば、我々をして神にまで到達せしめることも不可能ではない。

こゝで考へなければならぬのは「何を恥づべきか」「何を恥づべからざるか」の標準である。この標準こそは其の人の精神的、或は道徳的到達点を明示するものである。然らば何によつて此の標準を立てるか、恥づべきこと、恥づべからざることを、を明に分つ標準を何処におくべきか。それは人々によつて異なるべきである。一銭一厘の利を争ふことは商人には恥づべきことではないが、或る人々には恥づべく卑しむべきことだ。生白い顔をしてゐる事は農村の青年としては恥づべき事であるが、ある人々にはそれは意に介するに足らぬ。

かう考へて来ると結局自己の立場をはつきり認識するといふ事が肝要になつてくる。自己の真面目を明に知るといふ事になつてくる。吾人は先づ真剣なる省察によつて自己の立場、真面目をはつきりと知り、かくして何を恥づべき、何を恥づべからざるかを弁別しなければならぬ。道義的人格はかくして始めて確立せられるのである。

恥づべき事を恥ぢず、恥づべからざることを恥ぢる、かゝる事が吾人の日常生活に尠からずありはしないか。吾人はまづそれを反省して見なければならぬ。時はまさに省察にふさはしい秋だ。

(昭和六年九月号)

#### 【昭和六年を送る】

烏兔勿々、早くも月は師走となつて、過ぎし一年を回顧しなければならぬ様になつた。

昭和六年は各方面に於て多事であり、而してまた多難であつた。我が教育界も亦然りで、師範学校規程、中学校令施行規則に劃期的な大改正が施されたのは、年明けの間もない事であつた。引續いて他の種の学校にも、時代の要求に適合した改正が施される機運が動いて、教育界はまさに歩調を一つにして、新しいスタートをきる時代が来るのだといふ期待を抱かせた。八月上旬突如として公にされた文部省の学制改革案なるものが、余りに大がかりのものであり、且つ又余りに異常の改革案であつた為、社会を聳動せしめる事甚だしく、毀譽褒貶盛に起り、実現の可能性あるものはほんの一部分に過ぎなくなつてしまつた。之が為に却つて改革の実施を後らせた如き觀あるものもないではない。高等女学校の如きは恐らく其の一であらう。前年より逼迫してゐた地方財政は本年に入つて、益々其の深刻さを増してきた為、三月の年度末には教員給の問題が紛糾し、

師範学校の新卒業者中、直に就職せしめ得ざる者約五十を算するといふ未曾有の現象さへも起つた。かう考へて来ると決して愉快な一年ではなかつた。しかしかゝる中にあつて實際教育に従事する諸君が退嬰に陥る事なく、一層緊張せる態度を以て、この難局打開の先頭に立ち、或は立たうと務められた事は悦びに堪へない所で、この悦びを懐いて古い年を送り、新しい年を迎へようと思ふ。

(昭和六年十二月号)

### 祝・叙勲

(平成二十八年十一月三日)

#### ☆旭日双光章

地方文化功勞

川端 正 殿

松山市山越二丁目四一十九

(昭和二十八年卒)

#### ☆瑞宝双光章

教育功勞 尾上 眞一 殿

今治市菊間町種一六九一四

(昭和四十四年卒)

教育功勞 増池 武雄 殿

八幡浜市保内町川之石

一番耕地二三七一—二一

(昭和四十年卒)



# 文 芸

## 俳 句

### 愛大 俳句研究会とは



羽倉 拓摩

(三回生)

愛大俳句研究会は現在二十七名(十二月時点)で活動を行っています。昔に比べ大所帯になりつつあります。

主な活動は毎週句会を行っているほか、月に一度吟行会を行っています。今年は鹿島や四国カルストへ行きました。また、ここ数年では俳句甲子園や松山の俳句イベントのお手伝いを行っているなど「俳句」を通して地域との結びつきを大切に活動しております。更に、他大学の方とも合同で句会を行うことも多くなってきました。

他にも、NHKの番組である「全国学生俳句チャンピオン」や「俳句王国がゆく」等のテレビ番組にも部員が参加させていただくことも多くなってきました。

俳句研究会と銘打っていますが我が団体のモットーは俳句を『楽

しむ』ことです。部員には高校時に俳句甲子園に出た経験者が多いですが、大学に入学してから俳句を始め人も年々増えてきつつあります。それはやはり、俳句を楽しむという我が団体の在り方が認められてるからこそだとポジティブに捉えております。

さて、ではそんな私たちがどのような俳句を詠んでいるかをご紹介しますと思います。次の俳句は一回生から四回生まで様々な個性を持った部員たちのものになります。

土壁に鹿火屋の梁が顔を出す

岡戸 游士

新月やばくにはおととがいた

本田 桜

翳りより翳りへ消える蜻蛉かな

協々

とうとうとうとみみづくのこもり

水月

街路樹のまつすく感情に緑がない

福岡 日向子

いななきをひとつ荷馬車の春の泥

上岡 維新

洋服の遺骨は鉦花曇

小川 朱棕

黄落やかはうそはゆるやかにまはる

羽倉 紫羽

## 川 柳



日野 厚生

(昭三二卒)

朝ドラを見てから今日が動きだす

一日が二十四時間少なすぎ

もう一つ体がほしい退職後

新聞とテレビに時間又取られ

明日のため寝床へ急ぐ午前二時

ありがたいこまかい字までまだ読める

どのサプリアいていのか今元氣

いかがだったでしょうか。御覧の通りそれぞれの句作の方向性はバラバラです。だからこそ私たちは同じ卓を囲み句会といった活動を行います。自分と異なった世界を垣間見ることは、新鮮さや斬新さを伴って面白く感じるのです。

私たちはこれからも俳句を続けていきます。それは私達のみではなく、地域の俳人の方々や他大学の方を含めたたくさんの方々と共に俳句を「楽しむ」機会を大切に、俳句を楽しんでくれる人を増やすということでもあります。私たちはこのことを目標に活動しております。皆様も是非機会があるときに一緒に俳句をしませんか。

血圧計出るまで計るいい数値健康へ歩巾広げて早歩き

しんどさは買ってもせよ言い聞かす

長生きへストレスの種育てない

時々ライバルになる趣味仲間

会う度に元気をもらう人がいる

待たすより待つ方がいい待ち合せ

どうしよう二人に一人ガンになる

うるさいが妻の小言に愛がある

母白寿遺伝子信じ腹六分

ごめんねと虫は手でとる無農薬

電気代上げて原発事故始末

中東の対立あおり武器を売る

\*\*\*

退職後、あれもこれもやってみたいで、色々趣味を始めたが、今残って続けてやっているのが、川柳、民謡、ヨガと家庭菜園での無農薬、無化学肥料の野菜作りです。

家内にさそわれて加入した、宇和島歩こう会で月二回、十キロぐらいのウォーキングをしています(毎回は参加出来ずにいます)。歳を重ねて、足腰が弱ってきたので、夕方自転車約五キロほど走っています。

健康関係の本を沢山買って来ては、積んで置くだけで、読む時間

が取れず弱っています。出来るだけ長生きをしたいと思っています。

今のところ元気で、好きなことをやっていますが、血圧は高く、家内にお医者に行けと言われては行きません。行くとき高いですね、お薬を出しておきましょうということになり、血圧の薬は飲み続けられないといけないこと、痴呆になる心配があります。血圧は毎日、朝起きた時、入浴後、寝る前に計って様子を見えています。高く出ると、クルクル、グッパをします。すると下るのです。手を後に引いたり、前、横、上にのぼして、グッパを二十回、そのあとクルクルと手首を二十回まわすと下るんです。下るからいいわいと思っています。

799-3730

宇和島市吉田町立間

二一三三





短 歌

夫婦絶唱



加藤 明子  
(昭三五卒)

加藤 敏史  
(昭三六卒)

妻明子が思いもかけぬ病を得、もう十か月になるも快癒にはまだほど遠い。くじけそうになるときもあるが夫婦それぞれに懸命に病いに立ち向かっている。その過程で、歌を詠んだことのない妻が「父さん、短歌のようなものが浮かんで来た」と口述するのを私が筆録した。一生懸命病に立ち向かう過程で生まれた心の思い、夫婦それぞれの命の歌である。「病む妻を詠みしわが歌 病む妻が詠みし歌とがひびきとけあふ」それを夫婦絶唱と題した。

—\*—\*—\*

病みたればパソコンできず年賀状誰にも出せず年が明けにし

リハビリの時は動かぬ麻痺の手足存在しめすがに夜にうずさく

雪解けの道来し夫にねぎらひの言葉もかけて泣きて愚痴言ふ

家事をなし多くの仕事も果たし つつ夫は毎日見舞ひくるるも

人さまの荷物になりしと悟りし 夜涙あふれて一睡もできず

夫と子が整えくれしわが家に半年ぶりに帰り来れし

真夜中に疲れて眠る夫起こし 申し訳なさで眠れなくなる

(明子)

健康には十二分に気をつけし妻が脳梗塞に倒れ伏すとは

賀状書きとお節作りに帰りたしと歩けぬ妻が我に言い張る

正月も普通食なる病院へ数の子 黒豆持ちて妻訪う

麻痺したる手足痛きと苦しがるもさするよりほか為す術のなし

痛みなき脳梗塞の人あるにわが妻哀れ日ごと苦しむ

帰りたいつらいと涙す妻の顔なでて慰むわれも泣きたし

父さんが頼みと言ひてすがるよな目にうなづくも哀れでならぬ

病院より半年ぶりに帰り来し妻は家の灯やさしいと言ふ

(敏史)

799-0711 四国中央市土居町 土居二二七五一

俳 画

春夏秋冬



山口 恭子  
(昭四八卒)

退職して十年以上が経ち、日々の暮らしの中の些細な感動を一枚の絵に、俳句に表現できる楽しみを味わっている。

〈春〉

夫も退職し、行動を共にすることが多くなった。笹野高史主演の「陽光桜」を観た後、紺碧の空に誘われて二ノ丸から城山に登る。久々の城山に最後の坂はきつかった。

〈夏〉

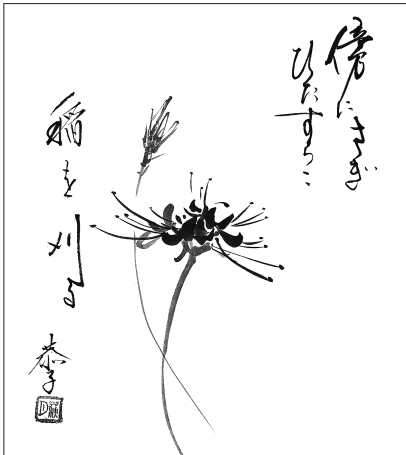
初めてへちまを植えた。大きなへちまが二個実った。皮と種をとって、入浴時に使っている。子供の

〈秋〉

稲を刈る傍らで、カエルやバッタを狙って「さぎ」がつかず離れずついて来る。コンパインの音にも動じない。周りの土手には赤い曼珠沙華のじゅうたんが広がっている。

〈冬〉

今年秋、息子が結婚した。二十九年は酉年。いつまでも二人仲よく飛んで欲しい。息子達にプレゼントした。



# 会員の声

## 担任のクラス会出席

### 「至福」



小野植元幸  
(昭二九卒)

同窓会報一二二号「師範学校から教育学部へ―百四十年の歩み―」より、歩みが詳細にわかった。明治九年、松山市二番町に開校、明治二十年木屋町に移転。戦災で焼失し、昭和二十年九月、三津浜の女子部校舎で本科生。予科生は、太山寺本堂・宿房・同地区の公会堂で学んだ。私の叔父は、木屋町で昭和のはじめに学び、私が二歳(昭和九年)大洲市徳の森(現平小学校)に着任。その後南久米、中野小着任。その間、休みには、喜多小学校に、近隣の教員が集まりテニスをしたという。同級生には、大洲市上須戒出身梶谷永五郎先生がおられ友好があり、後、梶谷先生は、大洲市の教育長に栄転された。後輩には、大洲市平野町出身の大川咲一郎先生。先生は町村合併の初代五十崎中。長浜中学校長になられ活躍された。

叔父の師範学校に藤谷庸夫先生がおられ、県美術教育に貢献され

た。先生は油絵が専門で中央でも活躍。先生と交友があった。

叔父は、札の辻にあった師範学校(今は師範学校跡)で学んだ。現在、県警本部第二別館が建っている。叔父は、喜多郡内で十年勤務し、戦時中神戸市内に転出。管理職で定年退職。叔父が教員であるので、父が「教育は国の本、教育は国をかける仕事」と勧められた。昭和二十七年入学時、藤谷先生がおられ、叔父より指導教員を依頼してもらった。

その頃、田舎の学校でも二百人近い児童がおり教員不足。旧制中学、女学校生を代用教員として採用。教員の給与は低く初任者は米二俵分。当時米一升百円だった。「所得倍増論」を政府が打ち出し、「人材確保法」にて、教員の給与も改善された。

六十三年前、新採用で着任。担任した教え子から(満七十歳)、「クラス会を松山でするので来てほしい。」と案内があった。

七月二日(土)道後であり出席。すでに二名(男)が他界。当時の面影があり、すぐ名前が浮かんだ。担任だった子供の消息や、クラスの思い出話。写生会、遠足、運動会。特に、運動会は三回目になったことなど、話はずきることなしで再会を約束して散会。

昭和三十一年二校目僻地校に着任。満七十歳になる教え子から

「クラス会」の案内があった。児童減により廃校となり、思い出の校舎で、七月十七日開かれ出席。四十五名四年生担任。授業中、いつも三人ぐらい歩きまわっていたが、明るく苛はなかった。

現職時二十三歳、教材研究不足の授業で、「生きぬく力」を育てる教育もできず未熟な教師だった。出席者の母校、家族等諸々の話。社会での活躍で、貢献されていることに喜び、成長されたことに感動した。教師をしたことはよかった。「教師冥利」と実感した。他界した父に感謝し、現職時から退職後、それぞれの人に支えられ、平均寿命まで生き、二回のクラス会に参加し楽しい至福の二日間だった。

昭和二十八年四国国体で役員として参加。来年の国体、東京オリンピックまで生きたいものである。

(☎) 791-3351 喜多郡内子町 五百木一五四



愛媛県師範学校校舎

## 放送大学四月入学生 募集のお知らせ

放送大学では平成二十九年四月入学生を募集中です。

〈募集期間〉三月二十日(金) 必着

放送大学はテレビなどの放送を利用して自宅で学べる通信制の大学です。

放送大学では心理学・福祉・文学など幅広い分野を学べます

が、同窓会員とくに現職の方々はずきに掲げる教育関係の免許資格取得などができます。

○放送大学の大学院を利用して、**専修免許状**の取得が可能です。

○放送大学の科目を利用して、**特別支援学校教諭免許状**の取得が可能です。

○放送大学の科目を利用して、**司書教諭資格**の取得が可能です。

○放送大学の講習(年二回)を受講して、**教員免許更新**ができます。

○平成二十九年一学期(四月入学)から**小学校外国語教育教授基礎論**を開講します。

資料を無料で差し上げております。お気軽に**愛媛学習センター**までご請求下さい。



## 放送大学

教養はエネルギーだ。

一科目からでも学べます

平成29年度4月入学生募集中!

(平成29年3月20日まで)

問合せ先 愛媛学習センター

TEL 089-923-8544

●インターネットで資料請求・出願できます。 ●資料請求専用フリーダイヤル

放送大学 www.uoj.ac.jp ☎ 0120-864-600



# 升田栄先生を偲ぶ



吉原 宏文  
(昭四二卒)

松前町義農公園内「義農之墓」の老松の傍に一基の歌碑が建てられている。その前面に、

み墓守り幾年経りぬ老い松の根に屈まへば袖に露する

無哲道人

とあり、裏面に、次の文面を見る。

無哲道人 名は升田栄 明治三十一年 松前町浜に生る

志を抱いて東京に出て 幣原坦博士に私淑し 苦学力行 東洋大学仏教学科に学ぶ

後 台北帝国大学図書館長となり 亦同教授となる 博學にして 特に仏教哲学に精通し 夙に 義農精神の高揚に努む

愛媛県知事白石春樹撰  
昭和五十一年秋松前町有志建立  
升田栄先生は、哲学者であるとともに歌人でもあり、多くの短歌

を遺しておられる。歌碑の一首は、先生の遺詠集「義農様」から採用したものである。

義農様とは、わが愛媛県松前の郷に神鎮まり給ふ義農作兵衛翁の御ことである。今更、その神靈の義胆聖行を云々するは、凡そ贅舌である。唯々畏き極みである。海嶽の大慈その鴻恩、偲べば、伏仰唯之感涙のみ。今茲に、其の稚拙をも顧みず其の杜撰をも怖れず拙として畏み畏み詠歌を献げ奉る。

その最高級の敬語に先生の義農様尊崇の程が窺われる。

先生は戦前、国立の総合大学・台北帝大で教鞭をとられた。私立大学卒の学歴で帝国大学の教授に就任は異例のことであった。しかし、敗戦は無惨にその運命を打ち砕き、先生は裸一貫で帰国されたのである。暫く、先生は京都に移られ、京都の仏教関係の大学で専門の哲学を講じながらも、故郷松前町への思いを募らせられたのである。

暑しとてかこちやはする故郷の義農様の瑞穂豊むと思へば秋されば黄金波する故里のみおやの野良をふし思うかな

(以上、篠崎良広著書より)

その後また、京都から、松山市美浜町へ復帰され、最後の余生を悠々自適に過ごされておられた先生(人生哲学研究会主催)と私(吉原宏文)との不思議な御縁が開かれることとなった。私は、愛媛大学教育学部在学中「仏教青年会」という学内サークルに所属して、偶々愛媛新聞を介して、升田栄先生の存在を知ることとなった。当時、小学校教員養成課程の諸教科に得意なものがなかった私は、学外の先生に仏教哲学の御指導を仰ぎ、「道德教育(ルールを守って、みんな仲良く過ごせるための教育)の基礎としての業感縁起論(共業の所感)」という、一筋縄ではいかない難解な卒論テーマを託されたのである。しかしながら、これがその後の「業(Karma) 研究の出発点となる」とは……

さて、有名なドイツの哲学者、カント (Immanuel Kant, 1724-1804) の道德哲学「実践理性批判」(結論)の冒頭部分に、「わたしたちが頻繁に、そして長く熟考すればするほどに、ますます新たな賛嘆と畏敬の念が心を満たす二つのものがある。それは、

わが頭上の星辰をちりばめた天空と、わが内なる道德法則である。これは、升田栄先生が特に好きな言葉である。今、先生ほどの星であろうか。また、ハイデッガー (Martin Heidegger, 1889-1976) の言葉 (Auf einen Stern zu gehen, nur dieses)「一つの星へ向って行くこと、ただこれのみ」も先生に献げたい。この文章は、私の敬愛する愛媛大学名誉教授(ドイツ哲学の碩学)溝口誠一先生から御教示いただいたものである。

最後に、われわれ教育者は、子供たちに各教科の技能(technique)を教えるだけでなく、人間学の本質・品性 (grace) を身に付け、真の人間を育てる教師とならなければならぬと思う。これは、升田栄先生の悲願であられたと確信しています。先生は、昭和五十一年十月二十日、七十八歳でその生涯を全うされた。そして、波瀾万丈の七十四歳の人生となった私も、今、切に先生のことを偲ぶのである。

平成二十八年九月二十八日



### 参考文献

- 「義農様」―哲学者・升田栄先生遺詠集より―篠崎良広(伊予郡松前町大溝升田守先生の紹介による)
- 「升田栄遺稿集」―発行者・升田栄遺稿集刊行会―
- カント―「永遠平和のために」―津田塾大学教授・菅野稔人(NHKテキスト・二〇一六年八月Eテレ)

〒731-0135 広島市安佐南区長束一丁目一八一五

# 支部だより



## 爆笑僧都寄席

退職時に

記念すべき五回目を

南宇和支部長

若田 正

(昭五四卒)

私が、南宇和支部の支部長を引き継いで始めた「落語会爆笑僧都寄席」が、五回目を迎えた。

へき地小規模校である愛南町立僧都小学校の子どもたちに「伝統ある本物の日本文化」である「生の落語」に触れさせ、子どもたちの「生きる力」につなげたいと考え始めた。また、校区の地域は、各地で問題になっている少子高齢化が進み、「伝統ある本物の日本文化」に触れる機会がなくなっている。そこで、お年寄りにも「伝統ある本物の日本文化」の「生の落語」に触れていただき、笑って健康に過ごしていただきたいと考え始め、今年で五回目を迎えた。今回も開催するにあたって、問

題になることが何点があった。

まず、会場をどこにするかという問題だ。私が異動により、勤務校が変わった四回目の昨年度は、僧都小学校区のことを思い始めたことなので、これまで通りの大きなにも雰囲気的にも適した、最大八十名近く収容できる僧都小学校近くの「ふれあい交流館」と、参観日と抱き合わせて現任校の久良小学校で開催した。今年度は、地域行事と学校行事の日程の関係で久良小学校での口演がむづかしく、久良小学校の児童や保護者に対してどうしようかと悩んだ。結果、児童にアンケートをし、どうしても落語を聞きたいという回答が多かったので、保護者に対して、僧都小学校近くの「ふれあい交流館」までの車で送迎と、できれば一緒に落語を楽しんでいただくことをお願いした。

次に、開始時刻の問題だ。落語会当日の午後、僧都小学校の児童が、町のイベントで歌の発表をすることが予定されていて、例年の午後三時開演では、落語会へ参加できない。午後七時開演のように夜開催にすると、久良小学校の児童や保護者の参加がむずかしくなる。そこで、午後五時開演とした。さらに、経費の捻出と、合わせ

てどういう落語会にするかという問題だ。五回目ということで、これまでと少し違った形での落語会にしたいと考え、予算の獲得先に苦慮し、落語会の構成に悩んだ。幸いなことに、日本教育公務員弘済会愛媛支部に相談すると、なんとか協力していただける目途が立った。そして、六月に内子座創建百周年記念事業として、「内子座爆笑落語会」愛媛の噺家大集合」があり行ってみるところ、桂三幸氏が「ギャラは安くてもいいですから呼んでください。」と言っていたので、ダメもとで菊志ん師匠を通じてオファーをしてみた。

すると、飛行機代をみてもらえろと行ってもいいという回答を得たので、落語二人会の構成にしようかと案が決まった。後は、飛行機代の捻出だが、昨年度に引き続き幸いなことに、僧都小学校の保護者が関係する地元産業者さんが、快く引き受けてくれた。後は、同窓会がどこまで面倒を見てくれるかという問題だけになった。

そして、同窓会事務局との交渉の問題だ。今年度、同窓会事務局の担当者が次々と入れ替わり、どなたと交渉すればいいかわざされた。一学期の間は企画交渉段階で、実務的な事柄がなかったので助かったが、チケットの手配とかが始まる夏休みには、私がちようど一月足らず入院することとなり、実務作業が例年になく遅れた。日程については、菊志ん師匠の空いているのが十月の最終土曜日

しかなかったもので、そこしかなく、一学期中に抑えることができた。日程確保から、飛行機、列車の便探し、行動スケジュールの確認等、まるで菊志ん師匠と桂三幸氏のマネージャーをやっているようだった。

日程が決まり、事務局の菅田先生へ菊志ん師匠のチケット等の手配を頼み安心したのだが、桂三幸氏が、急ぎよ三十日(日)の午前中に大阪で仕事が入り、確保していたホテルを一部屋キャンセルした。費用が少し浮いたのと、松山から菊志ん師匠と一緒に来ていただいたので私が迎えるに行かなくて済み、当日の午後ゆっくり準備ができた。

迎えた当日、「ふれあい交流館」で待っていると、予定より遅れて二人が到着した。聞いてみると、ナビの案内で来たために、とても狭い山越えの道の案内で、スリルを味わって来たということだった。事前の細かい確認を怠ったためだと反省した。それでも、余裕をもったスケジュールだったので、マイクの調子等の確認をして本番を迎えることができた。

様々なことを解決し迎えた本番。今回は、二人会になり、出囃子のCDを二人で交代しながらかけていただいたり、また、二人同時に質問コーナーを設定していただき、江戸落語と上方落語について解説していただいたりして、とても充実したものとなった。私も座布団返しをさせていただき、少

しだけ笑いを誘った。

前任校と現任校の児童と保護者を含め七十名余りの方が来場され、菊志ん師匠の「まんじゅうこわい」「金明竹」と桂三幸氏の「ももたろう」「初恋」の四つの落語を楽しんでいただいた。菊志ん師匠の熟練してきた熱の入った話し方や表情と、桂三幸氏の桂文枝師匠との三年間の修業時代の話を聞き、来場された方はすっかり虜になったようだった。初めて本物の落語に接した現南宇和支部長も「こんなに面白いものとは知らなかった。」と絶賛してくれた。

入場料(木戸銭)として五百円をいただいているが、お茶をお渡ししており、今回は五周年記念として色紙を用意し、先着二十名様に無料でサイン会をしたので、良かったのではないかと思っている。

アンケートによると、菊志ん師匠を九割近くの来場者が知っていたと回答しており、少しずつではあるが菊志ん師匠のことが浸透し、そして、来年度も十割の方が来場すると回答し、楽しくて充実した会と思われたことが、何より力強かった。

最後に、同窓会の方々に受け付けや駐車場などの係りを手伝っていただいたことや、予約席が埋まり始めたことが、少しやりがいを感じるところである。様々な課題も出てくるだろうが、一つ一つ解決し、七回目十回目と回を重ねていきたい。





「爆笑僧都寄席」  
の様子



熱演する菊志ん師匠



2人の質問コーナー



熱演する三幸氏



サイン会の様子



観客の様子



# 第十五回愛媛大学教育学部同窓会懇親会

愛媛師範創立百四十年

記念懇親会

## 報告

百五十名を超す参加者で懇親会は始まった。

第十五回愛媛大学教育学部同窓会懇親会が、連日猛暑が続いていた八月二十日(土) 全日空松山ホテル本館四階の大ホールにて、百五十名を超す大勢の参加者の基、盛大に開催された。

今回の同窓会懇親会は、前身校である愛媛師範学校が一八七六年(明治九年)設立以来百四十年に当たる記念の年でもあり、そのことを考慮し、前回、前々回の同窓会報に、懇親会案内のパンフレットを添付し、全会員に呼びかけた。

懇親会は、定刻正午を期して、山本千鶴子同窓会副会長の名司会で始まった。



愛媛大学教育学部同窓会



峯本高義同窓会副会長より開会のことは、山下雅司同窓会理事の恩師、会員物故者への黙祷呼びかけで参加者全員黙祷を捧げた。

高橋治郎同窓会長から、歴史と伝統ある教育学部、懇親会について、また、懇親会の意義についても語られ、「来て良かった。楽しかった。次回も……。」となる会を祈念したい。」と熱い挨拶があった。

来賓挨拶として、佐野栄教育学部長さんから、「愛媛大学七学部の内、教育学部同窓会は唯一、学

愛媛師範創立140周年記念 第15回愛媛大学教育学部同窓会



部単位での同窓会懇親会が開催されているが愛媛大学で一番歴史のある教育学部であることが、今日各期の同窓会員の方がこのように大勢参加されていることから深く感銘を受けます。」との挨拶があった。

続いて、ご臨席いただいた来賓、七名の恩師、兵頭寛先生、井門義男先生、宮内正義先生、石川廣美先生、奥定一孝先生、村上嘉一先生の紹介があった。

ここで、今回も記念懇親会を祝って、愛媛大学文化サークルの邦楽部からの賛助出演をして頂き、次のようなモダンポップス調の素晴らしい演奏に会場の雰囲気は一段と盛り上がった。

その演奏曲目は、  
春よ、来い  
青春時代  
明日があるさ

続いて、前会でも大勢の方から強い要望があった、「愛媛大学学歌」だ。本会でも前もってその演奏を邦楽部に強く要請していた。学歌が演奏されると、期せずして会場から歌声が湧き起こってきて、青春の歌声と化し、会場が弾んだ。宴への準備は整った。



記念の懇親会を、言祝ぎ伊予漫才を舞い踊る衣装で、壇上上がり、声高らかに「乾杯!」、会場からも呼応して「乾杯!」と会場に響き渡った。

宴が始まった。各テーブルとも、旧交を温める会話、強い絆の先輩後輩の会話、会場は笑顔笑顔の明るい雰囲気になった。

満を持してのアトラクションが始まった。トップバッターは、伊予漫才の衣装を着けて乾杯の音頭をとられた満田泰三氏。見事な伊予漫才を舞い踊って、会場を壽色に染めた。続いては、矢野聖寿氏が煌びやかな衣装で登場。プロの演歌歌手としての実力で美声を披露し、会場を矢野ワールドに引き入れた。続いては、高須賀嘉夫氏の登場。実に熟達した張りのある美声で、詩吟を朗々と吟じ、会場をうならせた。

会も酣になったところで、懇親会名物となった「表彰セレモニー」が始まった。参会者の中で最高齢者には「最長老の参加で賞」、最年少参加者には「一番若いで賞」一番遠くから参加された方には「遠くから来てくれましたで賞」、そして各期参加者の内、最多参加者の昭三十、昭三十二期へは「よく集まったで賞」とそれぞれ記念品が渡され、それぞれの方々からユーモア溢れるスピーチがあり、会場はやんやんやお祝いのお拍手を贈っていた。続いて抽選会に入った。懇親会菜にある参加者番号を記録したカードの入った籤箱から、無作為に、高橋会長さんが

引き、当選者に賞品を贈呈することとで、これでも会場が沸いた。会場はいやが上にも盛り上がり、恩師、同期、先輩、後輩が会場いっぱいに入り交じり、ビールを酌み交わしながら笑顔で談笑している楽しい雰囲気に包まれていた。

「宴も酣となって参りましたが。」司会者の声に、早くも閉会の時間が迫っていることに驚いた。閉会の挨拶は、村上朋子同窓会副会長が見事な締めくくりに挨拶をされ、最後の締め「もう一度邦楽部にご登場願ひ、愛媛大学学歌を演奏して戴き、会場の皆様に学歌を斉唱しようではありませんか。」とサブライズ提案があった。

そこはさすが教育学部の同窓生、ピアノ共演者も現れて、即興で前奏を始めると、邦楽部は急なアンコールにもかかわらず見事な演奏で応じ、共演が始まった。それに呼応して会場から大合唱が湧き起こり、青春の歌声と化した。会場は最高潮に達した。

高揚感の中、学歌斉唱が終わった。大拍手が湧き上がった。懇親会は盛會に終了した。





懇 親 会 風 景



名司会の山本副会長



素晴らしい邦楽演奏



乾杯！



乾杯！ 乾杯！ 乾杯！



恩師紹介！



伊予漫才の名手満田氏



プロの歌声矢野氏



おい元気が 久しぶりじゃねー



楽しいのお



友遠方より来たで賞



同期がよく集まりましたで賞



お楽しみ抽選会始まる



当選おめでとう！



村上副会長がサプライズ提案



声高らかに愛大「学歌」斉唱



# 学部トピックス

## 教育学部留学生歓迎会を開催しました

【十月二十五日（火）】

平成二十八年十月二十五日(火)、教育学部本館二階会議室で、教育学部留学生歓迎会（後学期）を開催しました。教育学部では、今年度十月から新たに三人の留学生を迎え、現在十一人の留学生が在籍しています。歓迎会には、留学生、教育学部長、指導教員、国際交流委員会委員、留学生チユータ、事務職員などが一同に集いました。

国際交流委員会委員長の立入哉



教授の司会のもと、佐野栄教育学部長の歓迎挨拶があり、乾杯でパーティが始まりました。その後、留学生が紹介され、それぞれ日本語で自己紹介を行いました。歓談を通して交流が行われ、和やかな雰囲気の中で閉会となりました。留学生の皆さんにとって、本学で過ごす留学生活が有意義なものになるよう願っています。



## 四国がんセンターで、教育学部の学生たちによるアウトリーチコンサートが開催されました

【七月七日（木）】

平成二十八年七月七日(木)、松山市南梅本町にある独立行政法人国立病院機構四国がんセンターで、教育学部の学生たちによるアウトリーチコンサートが開催されました。

同病院から依頼を受け、入院中の患者さん、そのご家族、職員の皆さんに、さわやかな音楽で七夕の宵を過ごしていただこうと、クラシックから歌謡曲、デイズニー音楽まで工夫を凝らした約一時間

の演奏を披露しました。演奏の様子は、会場に足を運べない病室の患者さんたちにもライブで配信されました。

学校教育教員養成課程音楽教育専修の四年生／中田豊也君、同二年生／上野健一君、小学校サブコース一年生／土本真緒さん、音楽文化コースの三年生／白川紗弓さん、松木わかかなさんの五名の学生と准教授の市川克明先生による演奏は、会場のエントランスホール



コンサートの様子



ルに響き渡り、金管五重奏「宇宙戦艦ヤマト」の演奏では、会場から拍手子が湧き上がるなど、和気あいあいとした雰囲気で開催しました。

愛媛大学教育学部の学生による、同病院での音楽領域でのアウトリーチ活動は、今回で四度目となり、好評を博しています。





### 教育学部の安積京子講師がドイツの音楽祭に招待され演奏しました

#### 【六月二十五日(土)】

平成二十八年六月二十五日

(土)、教育学部音楽教育講座の安積京子講師が、レミーゼ夏の音楽祭で演奏し、南ドイツ新聞(Süddeutsche Zeitung)「ドイツを代表する新聞のひとつで発行部数は四十四万部」から高く評価されました。レミーゼ夏の音楽祭は、ドイツ南部・バイエルン州・ミュンヘン郊外のガウティン市にあるお城「ブースベルク」で毎年夏に一ヶ月半の期間、開催されています。

安積京子講師は、昨年の秋にドイツのレーベルOrpida社から、ヴァイオリンとピアノのデュオCD (Songs for Violin and Piano) をリリースし、そのCDがバイエルン放送局のクラシック・ラジオ番組で放送され注目されたため、今回音楽祭に招待され

ました。

共演者であるヴァイオリニストのツオルニツァ・バハロヴァさんは、安積講師のドイツ国立ワイマール・フランツ・リスト音楽大学の学友で、現在はニュルンベルクフィルハーモニー管弦楽団のコンサートミストレスを務めています。二人は音楽祭で、ベートーヴェン作曲、ヴァイオリンとピアノのためのソナタ第九番Op.47「クロイツェル」の他、レスピーギ、ヴラディゲロフ、サラサーテの作品を演奏しました。

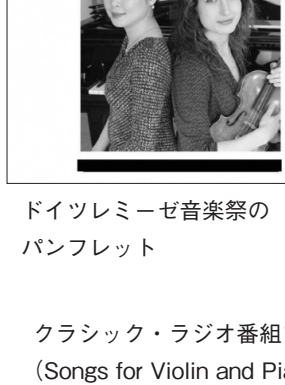
【以下、平成二十八年六月二十八日(火)の南ドイツ新聞の一部抜粋したもの】  
メランコリー(憂鬱)とメリスマ(歌詞の一音節に複数の音を与える装飾的な歌い方)ピアノとヴァイオリンでの歌...

安積京子とツオルニツァ・バハロヴァはレミーゼに於いて色彩のコントラストに富むソナタの作品を演奏した。安積とバハロヴァのデュオは……派手に演奏するのではなく、念入りに細部にまで気をつけて演奏することにより、情熱的な上下の変化が、語るような特徴を明らかに示し、そこから、繊細で悲しい歌が現れてきた。……パンチョ・ヴラディゲロフの『ブルガリア組曲』作品21「歌」……バハロヴァはこの曲でも演奏家としての情熱と、熱烈に刺激され洗練された内容との間の中庸を見つけていた。安積は伴奏者として、厳密な演奏を続け、暗い響きの内容で支えていった。……レスピーギの一九〇六年の『五つの小品』作品62は、まさに、郷愁をそそる感傷性、楽しげな感覚的な喜び、情緒に富む快適さ、踊るような活気等の間を巡って楽しく演奏していく花火のようである。安積とバハロヴァの演奏では、あらゆる方向に向かっての響きでありながら、それでもコンパクト



KLEINER FESTIVAL 23. Juni - 18. Juli 2016  
IN DER KASSA RAUHE KUNST GARTING  
SAMSTAG 25.6.2016 19.30 h  
VIOLINE UND KLAVIER  
"Songs for Violin and Piano"  
Kyoko Asaka, Klavier  
Sorritza Baharova, Violine  
Die japanische Pianistin Kyoko Asaka und ihre aus Bulgarien stammende Violin-Partnerin Sorritza Baharova haben im letzten Jahr eine CD eingespielt und wurden prompt von der wichtigsten japanischen Musikzeitschrift mit der "CD des Monats" honoriert. Mit virtuosen, romantisch angehauchten Violin-Pieces von Ottorino Respighi, einer rasanten, tiefgründigen Ballade von Fanchon Vadigros, die Zigeunerweisen von Pablo de Sarasate und Ludwig van Beethovens Kreuzersonate stehen durchaus unterschiedliche Komponisten auf dem Programm, die ein fulminantes Konzerterlebnis versprechen.

な形で十分説得力のある全体像がでてくる。このデュオはその中に美しいメロディーの形や、ほとんど終わりのない歌の流れとして広がっていく形で人の心をつつ霧囲気を音で醸し出した。……ベートーヴェンの『クロイツェル・ソナタ』作品47は……第一楽章では前方に推し進める緊張感が激動する情熱となり、第三楽章では、鮮明なリズムが楽しく演奏される軽いギャロップになった。第二楽章の変奏曲のほのやかな歌曲は歌というテーマへの繋がりととなった。演奏が終わると熱狂的な拍手喝采とアンコールがあった。  
ライナー・パルマー著、翻訳：出射映子ドイツ公認翻訳・翻訳者  
★安積京子先生のオフィシャルウェブサイト  
<http://www.kyoko-asaka.com>



ドイツレミーゼ音楽祭のパンフレット  
クラシック・ラジオ番組で注目のCD (Songs for Violin and Piano)



Songs FOR VIOLIN AND PIANO  
SORRITZA BAHAROVA  
VIOLIN  
KYOKO ASAKA  
PIANO  
orpida

音楽教育講座 安積京子講師

Sonderausgabe Zeitung, 28. Juni 2016

#### Melancholie mit Melismen

Grünung mit Klavier und Violine: Kyoko Asaka und Sorritza Baharova streiten in der Remise kontrastreiche Sonatensuite

Grünung mit Klavier und Violine: Kyoko Asaka und Sorritza Baharova streiten in der Remise kontrastreiche Sonatensuite

Die japanische Pianistin Kyoko Asaka und ihre aus Bulgarien stammende Violin-Partnerin Sorritza Baharova haben im letzten Jahr eine CD eingespielt und wurden prompt von der wichtigsten japanischen Musikzeitschrift mit der "CD des Monats" honoriert. Mit virtuosen, romantisch angehauchten Violin-Pieces von Ottorino Respighi, einer rasanten, tiefgründigen Ballade von Fanchon Vadigros, die Zigeunerweisen von Pablo de Sarasate und Ludwig van Beethovens Kreuzersonate stehen durchaus unterschiedliche Komponisten auf dem Programm, die ein fulminantes Konzerterlebnis versprechen.

Die japanische Pianistin Kyoko Asaka und ihre aus Bulgarien stammende Violin-Partnerin Sorritza Baharova haben im letzten Jahr eine CD eingespielt und wurden prompt von der wichtigsten japanischen Musikzeitschrift mit der "CD des Monats" honoriert. Mit virtuosen, romantisch angehauchten Violin-Pieces von Ottorino Respighi, einer rasanten, tiefgründigen Ballade von Fanchon Vadigros, die Zigeunerweisen von Pablo de Sarasate und Ludwig van Beethovens Kreuzersonate stehen durchaus unterschiedliche Komponisten auf dem Programm, die ein fulminantes Konzerterlebnis versprechen.

Die japanische Pianistin Kyoko Asaka und ihre aus Bulgarien stammende Violin-Partnerin Sorritza Baharova haben im letzten Jahr eine CD eingespielt und wurden prompt von der wichtigsten japanischen Musikzeitschrift mit der "CD des Monats" honoriert. Mit virtuosen, romantisch angehauchten Violin-Pieces von Ottorino Respighi, einer rasanten, tiefgründigen Ballade von Fanchon Vadigros, die Zigeunerweisen von Pablo de Sarasate und Ludwig van Beethovens Kreuzersonate stehen durchaus unterschiedliche Komponisten auf dem Programm, die ein fulminantes Konzerterlebnis versprechen.

Die japanische Pianistin Kyoko Asaka und ihre aus Bulgarien stammende Violin-Partnerin Sorritza Baharova haben im letzten Jahr eine CD eingespielt und wurden prompt von der wichtigsten japanischen Musikzeitschrift mit der "CD des Monats" honoriert. Mit virtuosen, romantisch angehauchten Violin-Pieces von Ottorino Respighi, einer rasanten, tiefgründigen Ballade von Fanchon Vadigros, die Zigeunerweisen von Pablo de Sarasate und Ludwig van Beethovens Kreuzersonate stehen durchaus unterschiedliche Komponisten auf dem Programm, die ein fulminantes Konzerterlebnis versprechen.

### 教育現場等から同窓会へ 支援要請依頼について

教育現場等で、同窓会へ支援のご要望がありましたら、左記のような内容で、同窓会へご連絡下さい。

1. 支援要請のねらい
  2. どのような事を
  3. 何時頃
  4. 何処で
  5. 誰が、どのような組織が
  6. どのような方法で実施する
- その為、同窓会からの支援を要請したい。

要請連絡は、左記の所にメールして頂くか、FAX又はお手紙をお送り下さい。

[dosokai@ed.ehime-u.ac.jp](mailto:dosokai@ed.ehime-u.ac.jp)

↑  
メールアドレスは上記

### 教育学部同窓会 インターネット 開設しています！

お問い合わせ、会報への寄稿、住所、勤務先変更などの諸連絡にご利用ください。お待ちしております。

### 原稿募集

一次号 第一二四号  
短くても結構です。多くの方々の気軽な寄稿をお待ちしております。

○「会員の声」・「今、教育に思うこと」について、ふるってご投稿下さい。

★ 同期会や支部同窓会などの集会や活動について

★ 恩師・先輩・同僚の訪問や思い出について

★ 職場の近況や所感や活動について

★ 文芸(随想・俳句・川柳・短歌・詩・絵手紙等)について

★ 会員便り  
1 旅行記 4 この頃思うこと  
2 季節便り 5 忘れ得ぬ人など  
3 教育雑感

※ 投稿が多数になった場合には、編集委員会で選ばせていただきますので、ご了承ください。

★ 原稿〆切 四月三十日

★ 発行 七月一日 予定  
字数

★ 依頼者以外は千二百字厳守  
四〇〇字詰原稿用紙の一行を十五字にして書いて下さい。

★ 写真  
筆者の顔写真を添付してください。顔写真以外で内容に関連した写真もあれば送ってください。

### 会報の送料納付 について

平成二十八年七月号でもお知らせしましたように、会報の個人宛発送は、送料を各自で負担していただくことになっております。

出費多端の折柄恐縮ですが、未納の方は、左記要領で納付方お願い申し上げます。

#### 記

① 一年間五〇〇円で、二年間分ずつ収めるようになっていきます。

② 二年ごとの更新は、煩さなので、何年間かを、まとめられる方もあります。

納付期限 毎年三月三十日までとし、二年毎に更新する。

送金方法 郵便為替・現金書留・郵便振替で

振替口座番号  
〇一六四〇一七二七五四

送り先 七九〇一八五七七  
松山市文京町三

愛媛大学教育学部同窓会

領収書は、振替用紙をもって、かえさせていただきます。

### 愛媛大学校友会を ご紹介します！

愛媛大学校友会は、国立大学の法人化に際し、愛媛大学を構成する全ての構成員を一本化して支援できる団体をとということで平成十六年三月二十日に設立されました。法人化前に卒業された多くの同窓会員の皆様は「愛媛大学校友会とは何ぞや、何者ぞ」という疑問をお持ちのことと思います。この疑問に少しでもお答えいたしたく記事にしましたので、ご質問やご不明なことがございましたら、下記の連絡先までお気軽にお問い合わせ下さい。

さて、本学では、学部ごとに同窓会が組織されており、校友会は各学部同窓会、在学生及び他の組織(後援会、退職教職員会、現職教職員等)の会員を含めた合同の組織として、全ての学部の垣根を越えて設立された任意団体です。当会の「会則」で校友会設立後の入会金は二万円と定めていますが、例外として校友会設立時における各学部同窓会会員は「校友会員になりうる者」と定められておりますので入会金(二万円)を納入する必要はなく、既に皆さまは校友会の正会員でございます。

当会は愛媛大学の目的・使命である教育・研究の進展と地域への貢献を側面から支援するいわば「愛媛大学応援団」として、愛媛

大学の発展に寄与するとともに、会員相互の親交を図るため日々活動しています。具体的には様々な会員支援事業を展開しており、総会(三年に一回)や毎年愛媛大学と共催でホームカミングデイを開催しています。また、講演会・公開講座・演奏会などを開催していますので、積極的に参加いただきますようお願いいたします。また、在学生には入学支援、教育支援、課外活動支援、学業奨励金給付事業、留学生支援、就職活動支援、卒業支援等を行っております。(詳しくは校友会ホームページをご覧ください。)

これらの支援事業の内、校友会設置母体の各学部同窓会と連携し、在学生の就職支援を推進するため、主要な都市や地域に支部を設立する必要があります。平成十九年七月には首都圏支部、平成二十二年十一月に近畿支部を設置しています。この度、国内三番目の支部として、中国支部(仮称)を設置するため各学部同窓会の皆様には多大なるご支援とご協力をお願いいたします。

#### ～お問い合わせ先～

〒790-8577  
松山市文京町3番  
校友会館2階  
愛媛大学校友会事務局  
Tel 089-927-8610  
Fax 089-927-8609  
E-mail :  
office@koyu.ehime-u.jp  
http://koyu.ehime-u.jp



愛媛大学基金について

(ご寄附のお願い)

愛媛大学は、「輝く個性で地域を動かし世界とつながる大学」をビジョンに掲げ、地域社会の発展を牽引する人材の育成に取り組み、平成二十八年四月には「社会共創学部」を新設、教育学部を改組するなど、数々の教育改革を行っております。

併せてこの度、教育研究、社会、国際連携等を通じ、地域社会を担い、地域に貢献できる人材を育成し、継続的に輩出するために必要な事業（ワールドワーク・インターンシップ支援等）を実施するため「愛媛大学基金」を創設いたしました。

本基金により、卒業後に愛媛県内各企業において活躍できる「課題解決能力のある優秀な学生」を育成し、継続的に輩出することができ、また、多様な寄附形態に対応するため、「古本募金事業」「財物」や「遺贈」によるご寄附も整備しています。

皆様におかれましても、愛媛大学基金による学生修学支援事業にご寄附をいただきますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

お願ひするご寄附額

- (個人) 一口・一千元
- (複数口のご寄附をお願ひ致します)
- (法人・企業等) 一口・一万円
- (複数口のご寄附をお願ひ致します)

\*\*\*\*\*

※詳細につきましては、愛媛大学基金ホームページ

(http://foundation-office.chime-u.ac.jp/) にも掲載しておりますので、ぜひご覧ください。

問合せ先 愛媛大学基金室 (〇八九一九二七七八三四六)

会報送料 寄付者名

平成28・6 / 28・12月

菅 昇	白石 淑子	山崎 宗則	村上 治	上森 寿雅子	川越 芳彦	河村 恭子	山内 之夫	渡邊 安良	田代 豊雄	合田 弘	石丸 常	小松 ヒトミ	垣見 節子	藤原 伸朗	芝 令香	中島 正	山崎 クマヨ	山崎 操	三好 克己
-----	-------	-------	------	--------	-------	-------	-------	-------	-------	------	------	--------	-------	-------	------	------	--------	------	-------

敬弔

(物故会員)

(死亡年月日) (氏名)

28・7・2	28・6・29	28・6・16	28・6・16	28・6・10	28・6・7	28・6・6	28・6・5	28・6・4	28・5・24	28・5・23	28・5・14	28・5・14	28・4・23	28・3・1	(死亡年月日)	(氏名)
矢野 佳次男 (昭15・教養)	一色 邦利 (昭11・本科二)	戒田 光一 (昭20・本科)	日野 廣治 (昭18・本科二)	長滝 ツヤコ (昭13・本科二)	波多野 光 (昭28・愛大)	紅谷 一夫 (昭19・本科)	石川 富代 (昭25・本科)	和田 幸信 (昭26・愛大)	鈴木 敬一 (昭23・青師)	山田 ヒフミ (昭24・青師女子)	美野 石吉 (昭23・本科)	和田 清身 (昭36・愛大)	佐々木 幹男 (昭32・愛大)	山岡 重信 (昭24・愛大)		
28・9・28	28・9・26	28・9・21	28・9・18	28・9・17	28・9・13	28・9・8	28・9・4	28・8・30	28・8・28	28・8・27	28・8・24	28・8・15	28・8・11	28・8・10	28・7・31	28・7・18
柳原 慎悟 (昭29・愛大)	平田 守 (昭27・愛大)	玉井 忠雄 (昭22・青師)	正岡 和夫 (昭23・本科)	金久 輝男 (昭24・本科)	毛利 久夫 (昭30・愛大)	佐川 敬 (昭31・愛大)	阿部 茂樹 (昭30・愛大)	中尾 茂賀 (昭26・愛大)	野口 多喜夫 (昭14・本科)	村上 玉城 (昭26・愛大)	向井 ヨシノ (昭25・愛大)	野上 裕治 (昭59・愛大)	石黒 功宣 (昭20・本科)	木村 ソメエ (昭18・本科二)	東 與三郎 (昭20・本科)	菅 昇 (昭22・青師)
				28・11・21	28・11・14	28・11・9	28・11・8	28・11・6	28・11・3	28・10・28	28・10・27	28・10・23	28・10・23	28・10・23	28・10・18	28・10・6
				尾池 恵晴 (昭16・本科二)	山中 久夫 (昭24・愛師研)	久保 日丸 (昭30・愛大)	守屋 弘 (昭29・愛大)	松本 恵美 (昭26・愛大)	森 玲子 (昭31・愛大)	井上 時廣 (昭24・青師)	川井 正治 (昭26・本科)	福井 眞男 (昭18・本科二)	大野 伊平 (昭27・本科)	坂 和夫 (昭32・愛大)	三原 孝教 (昭26・本科)	門屋 睦男 (昭40・愛大)



「第7回愛媛大学ホームカミングデイ」を開催しました  
【平成28年11月12日】

平成28年11月12日(土)に、第7回愛媛大学ホームカミングデイを開催し、卒業生、学生及び教職員あわせて約290人が参加しました。

【プログラム】

13:00～ 同時開催イベント

- 愛媛大学ミュージアム見学
- 植物工場（樽味キャンパス）見学

15:00～ 式典（南加記念ホール）

司会：合田みゆき氏（フリーアナウンサー 教育学部卒）

- 学歌斉唱……愛媛大学合唱団
  - 学長挨拶……大橋裕一学長
  - 新学部紹介……西村勝志社会共創学部長
  - 特別講話『地震と道後温泉 - 謎解き道後温泉史-』  
高橋治郎愛媛大学名誉教授（NHK「プラタモリ」出演）
  - 学生サークル紹介……チアリーディング部
  - スペシャルコンサート  
ダンディーズ、附属小学校コーラス部
- 17:15～ 懇親会（大学会館1階）



受付の様子



会場の様子



学歌斉唱（愛媛大学合唱団）



大橋裕一学長の挨拶



西村勝志社会共創学部長の  
新学部紹介

ホームカミングデイは、卒業生の皆様に青春時代を過ごした愛媛松山に、授業や研究、サークル活動に励んだ懐かしいキャンパスに帰ってもらい、恩師との交流、後輩との交流、教職員、在校生との楽しい時間を過ごしていただくため、平成22年度から愛媛大学と校友会との共催で学生祭と同時期に実施しており、今回が7回目の開催となりました。

当日は、雲一つない秋晴れとなり、城北キャンパスには大勢の卒業生や教職員OBの皆様が詰めかけました。

また、式典に先立ち実施した同時開催イベントでは、「ミュージアム見学」「植物工場見学」が実施され、多くの方が参加しました。

南加記念ホールで行われた式典は今回も超満員となり、通路にパイプ椅子で補助席を設けるほどの盛況ぶりでした。

式典の第Ⅰ部では、まず最初に愛媛大学合唱団と参加者全員で学歌を斉唱しました。その後、大橋裕一学長より開会の挨拶と「愛媛大学のVISION」と題し愛媛大学の最近の動きについて紹介がありました。続いて西村勝志社会共創学部長から、本年4月に設立された新学部の紹介がありました。その後、今年2月6日のNHK番組プラタモリにも出演された愛媛大学名誉教授の高橋治郎先生による「地震と道後温泉 - 謎解き道後温泉史-」と題した講話があり、地震、地層と道後温泉の関連について、道後温泉は非火山性の温泉との説明があるなど非常に興味深い講話となりました。

第Ⅱ部のサークル紹介ではチアリーディング部に出演してもらい、若さ溢れるパフォーマンスに会場から盛大な拍手がありました。続いて、ダンディーズと附属小学校コーラス部が合唱を披露しました。ダンディーズには大橋学長、高橋校友会会長をはじめ愛媛の著名な方々が出演され、「明日があるさ」「365日の紙ヒコーキ」を美しいハーモニーで合唱しました。続いて本学教育学部附属小学校コーラス部は「月火水木金土日のうた」「愛をあげよう」「わたしの中にも」を合唱し、最後に参加者全員で「花は咲く」を合唱し閉会しました。

大学会館で行われた懇親会には250人余りが出席し、仁科弘重理事・副学長（校友会担当）の挨拶の後、今年7月から就任した校友会の高橋祐二会長の挨拶と乾杯により開会しました。また、学生団体活動報告が行われ、「剣道部」「軟式野球部」がそれぞれ活動報告を行いました。今後のますますのご活躍を期待いたします。

懇親会では本学のオリジナル品（えみかヴァイツェンビール、媛の酒、えみか粗挽きウインナーソーセージなど）が用意され、また、今回は下灘漁業協同組合女性部によるハモ料理の実演をしていただき、「ハモカツ」「ハモ天」「ハモじゃこ天」などが振る舞われ、参加者は舌鼓を打ちました。また、恒例となった5人のラッキーな方に「愛大のオリジナル商品」が贈呈される抽選会では、当選者が読み上げられると歓声やため息が出るなど大いに盛り上がりしました。最後に主催者を代表して大賀理事・副学長から挨拶と一本締めで閉会しました。



高橋治郎名誉教授の講話